
ビジネスライク・ラバーズ

朝江奈緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビジネスライク・ラバーズ

【Nコード】

N4628W

【作者名】

朝江奈緒

【あらすじ】

羽山和奏は或る日、蒸発した元カレに二百万の借金を押しつけられてしまう。困り果ててしまった和奏に、彼女が苦手としている上司、国峰斗真が提案した。「俺の『恋人』になってくれ。ビジネスライクな関係で」と――。金から始まる愛の無いラブコメディ。全27〜30話予定です。

気がついた時、羽山和奏^{はやまわかな}は二百万の借金を背負っていた。

冗談のような話だが、これが現実なのだから仕方が無い。借金の連帯保証人になど、決してなるべきではなかったのだ。それが例え、愛しい恋人のものだとしても。

和奏の恋人——今となつては元カレだが——は、少し気弱で穏やかな性格の青年だった。アキラという名の彼は和奏よりも一つ年下で、和奏がまだ短大時代のアルバイト先で知り合った相手だった。

バイトを続けている間は交際に発展する事も無かったが、和奏が短大卒業と同時にバイトを辞めてからというもの、段々と彼からのアプローチが増えてきた。そして、それなりの期間で友情関係を築き、関係が恋人に発展したのが二年前。和奏が二十一の時だった。

煙草は吸わない、酒もあまり飲まない。優しいし穏やかだし、女に手をあげる事も無い。

そんな彼の唯一にして最大の欠点。
それがギャンブルだった。

煙草を吸おうが酒を飲もうが構わないが、ギャンブル癖のある男だけは避けるべきだった。けれど、アキラはそこを除けば本当に優しい男だったのだ。その優しさは、墮落の裏返しだったのかも知れないけれど。

際限の無いギャンブルから借金を作ってしまうのはよくある話だ。そしてその連帯保証人を恋人に頼むのもよくある話だ。更に頼まれた恋人が断りきれず連帯保証人を請け負ってしまうのも。

その結果、和奏は蒸発した恋人の代わりに二百万の借金を抱える事になった。

或る日突然、彼は姿を消した。「ごめん。探さないでくれ」という、何ともありがちなメールを残して。その後、彼の携帯は一切繋がらない。恐らく死ぬつもりは無いだろうと思う。アキラにそんな勇気が無い事を和奏は分かっていた。

腹が立つよりも何よりも一番最初に感じたのは、どうしようもない虚しさだった。

アキラは蒸発した。和奏に全てを押しつけて。つまり、彼にとつての和奏は所詮その程度の存在だったのだ。大量の借金を押しつけて姿を消してしまえるほど、彼の中で和奏は軽い存在だったのだ。どれだけ「ギャンブルをやめて」と頼んでも聞き入れて貰えなかった時点で、それは察するべきだったのかも知れない。それでも和奏は彼が好きだった。だからその事に気付かないふりをしていた。

その次に、和奏は最も単純で最も大きな問題にぶち当たった。

——どうやって借金を返済するか。

貯金を全くしていない訳ではないが、二百万には手が届かない。今までにも、アキラのギャンブルで彼に金を貸す事が幾度もあったせいだ。

弁護士に相談する事も考えたが、ネットで色々調べた所、悪徳弁護士に捕まり逆に酷い目に遭った、という話を幾つも目にし、すっかり気が殺がれてしまった。勿論きちんと手続きをして何とかしてくれる弁護士も居るだろうが、それでも自己破産の流れに持っていく事になるだろう。出来る事ならそれは避けたい。

かと言って、毎月の給料からタラタラ返しているのは利息が膨らむばかりだ。連帯保証人になった段階で、和奏には返済能力があるという事になるが、このままでは利息地獄から抜けだせなさそうだ。

そして実家に泣きつく訳にもいかなかった。女手一つで自分と妹

を育ててくれた母に、これ以上の迷惑と余計な心配はかけられない。
「……会社、辞めるかなあ」

自宅マンションのベッドの上にひっくり返り、白い天井を見上げながら和奏はぼつりと呟いた。

一度言葉にしてしまうと、その重みが押し掛かってくる。けれど、これしか無いのではないか。普通の会社勤めのOLでは、いつまで経っても完済出来なさそうだ。会社を辞めて水商売で働いたとして、全てカタがついた後の再就職はこのご時世では難しいかも知れないが、まだ二十三歳だし、とりあえず派遣やバイトからならばそれなりにある筈だ。

会社を辞めると言っても勿論、今日辞めますと言ってその日に辞められる訳ではない。それから退職までの間に水商売の職を探そう。幸い、昨今の世の中はそちら系の職の人手を大量に募集している。全くのズブの素人である和奏でも、きっとその世界に入り込めるだろう。

どれだけ嘆いたとしても、こうなってしまったものはなってしまうのだから仕方が無い。仮にアキラが戻ってきたら腹いせに一発殴りはするだろうが、恐らく戻ってくる事の無いであろう彼の事をどれだけ考えても、それで借金を返済出来る訳ではないのだ。

そういう点において羽山和奏という女は、多分そこそこに踏ん切りのいい——或いは良過ぎる性格だった。多少なりとも、間違った方向に。

和奏は大手書店のネット販売部に所属していた。短大を卒業してから、就職して今年で三年目になる。可も無く不可も無くそれなりにコツコツと続けてきた仕事だが、やはり辞めるとなると相応の覚悟が必要でもあった。

まずは直属の上司に申し出なければならない。

和奏の上司——ネット販売部の主任である国峰斗真くにみねとうまは、社内で和奏が苦手としている相手だった。

別に嫌がらせをされている訳ではないし、見た目やそれ以外の何かが生理的に駄目という事も無いのだが、彼は基本的に言葉がきつく、常に難しい顔をしていて何となく怖い印象があった。切れ長な瞳と細いフレームの眼鏡が、更に気難しそうな顔を演出している事もあるかも知れない。

仕事は出来るし顔もいいし二十代後半の独身だし、言葉は確かにちょっときついけどその後のフォローもしっかりしてるし、と言って女子社員やアルバイトの女性には人気のようだが、和奏は如何せん「怖い」という印象を拭う事が出来なかった。

彼は電機関係や重工業などで有名な国峰グループの子息で、いわゆるお坊ちゃんだという話を聞いた事がある。あの人気ぶりを思うに、玉の輿を狙っている女が案外多いのかも知れない。

まあそんな事はどうでもいいのだ。とりあえず、適当な時に捕まえて話をしなければならぬ。

そして、いつ話そうかいつ話そうかと迷っている間に終業の間になってしまった。各々帰り支度を始める中、和奏はまだデスクで何やら作業をしている上司の元へ歩み寄る。

「あの、すみません、主任」

おずおずと呼びかけると、斗真は和奏を振り返った。別に睨まれている訳ではない筈なのだが、眼鏡の奥の切れ長な瞳が鋭い眼光を放っており、和奏は一瞬怖気づく。

「何だ」

「ああ、ええと……ちょっとお話があるんですが、お時間宜しいでしょうか」

人の居ない休憩室で、和奏は斗真と向き合っていた。

出来る事ならあまり細かい事は話したくなかったが、理由も話さずに退社という訳にはいかなかった。「辞めたい」と言えば「何故」と返ってくるのは至極当然の話だ。仕方ない。適当な嘘をつくよりは正直に話した方が分かつて貰えるだろうと、恥を忍んで、和奏は借金について包み隠さず話す事にした。

和奏の話を一通り聴き終えた斗真は、渋い顔をしたまま開口一番こう言った。

「お前は馬鹿か」

——ごもつとです。

あまり得意ではない上司のこの言葉に、和奏自身も賛同してしまう。返答には苦笑いしか出て来なかった。

本当に馬鹿なのだ。借金の連帯保証人など絶対になるべきではなかった。今後、もしも連帯保証人になろうかどうかどうしようか迷っている人間が現れたら、和奏はその相手を全力で引き留める事だろう。

「大体、辞める必要なんか無いだろう。羽山の給料でも返済能力は充分ある筈だぞ」

「はあ……それがその、ちょっとこう利息がですね、アレでソレな所ですね、いっぱいあつてですね」

「そんなにヤバイ所から借りたのか」

「みたいです」

ギャンブル癖のあるフリーターが金を借りられる所といったら、そこそに限られてくるものだ。トイチほどではないが、利息がなかなか厳しい所からアキラは借金をしていた。

引き攣った表情で返す和奏に、斗真はあからさまに大きな溜息を吐き出した。

「それで？」

「はい？」

唐突に問われて和奏は首を傾げる。呑み込みの悪い奴だ、と斗真は再度溜息をついた。

「羽山が借金を返したくて辞めるつもりなのは聞いた。その後、辞めてどうする気だ」

「え？ ああその、まだあまり決めてないんですけど、とりあえずキャバクラ辺りで……」

「無理だな」

「へっ？」

冷たい声色で短く言い切られ、和奏はポカンと口を開けた。

「大した話術も無い、際立って美人って訳でもない、キャバ嬢として働きたすには年齢は上の方。そんなお前にキャバクラで金が稼げる訳が無いだろう。初日に追い出されるのがいいトコだな」

「うぐっ……」

——そこまで言わなくてもいいんじゃないか。

いきなり女として色々全否定されたような気がして、しかし言い返せるだけの語彙が無ければ頭も回転せず、和奏は難しい顔で黙りこくった。斗真は淡々とした口調で続ける。

「じゃあスナックかと言えば、これも今とほぼ同じ理由で却下だな。羽山の場合、根本的に水商売で働けそうにない」

やっぱり女として全否定されているような気がしないでもない。水商売で働くには、何よりも女らしい振る舞いや気遣いが必要だ。そこが無理だと言われてしまっただけ。

「そうすると、お前に残された道は風俗かAV女優って所か」
「……………」

自分の身体を売ってお金を得ている女性たちがいる。それは多分きつと、かなり精神を擦り減らす仕事なのだろう。それも立派な仕事だと思っし、別に軽蔑する事も無いが、和奏にはそこまでの勇氣はまだ無かった。

返すべき言葉を失った和奏は、それでも何とか反論を試みる。

「きゃ、キャバでも何とかあります、多分」

「ならないな」

「そんな事……」

「ならない。絶対にどうにもならん。三年間毎日お前を見てきた上司として断言してやる。羽山には向いていない」

「うう……」

あまりにもきつぱりと言い切られ、和奏はいじけ気味に、内巻きにカールしたボブの毛先を軽く摘まんた。キャバ嬢になるならこの髪も伸ばして巻かなければならないか、などの外的な事を考えたりもしたのだが、今、目の前の上司にその辺りの可能性を全て潰されてしまった。

和奏だつて出来る事ならば会社を辞めずに事を進めたい。だが、それでは諸々厳しいと考えた末の結論なのだ。そんなものはただの愚行だと言われようと、和奏が考え得る中で出した答えがそれだった。

「——そこで、だ」

クイ、と眼鏡のブリッジを中指で押し上げ、話を区切るように斗真は言った。

「二百万、明日にでも払える仕事がある」

「えっ!？」

唐突にそんな事を言われ、和奏は思わず素っ頓狂な声をあげてしまう。今、この上司は何と言っただろうか。二百万、明日にでも払える——と？

「そ、それはAVや風俗以外ですか？」

「ああ。と言うか、仮にAVや風俗でも明日二百万は無理だろうな」

「じゃあ、まさかドラッグの売人とかそういう……」

「お前な。俺がそんなヤバイ仕事の話を持っているように見えるのか」

「えーと……」

「おい、そこは即座に否定する所だろうが」

「あ、すみません。見えません、全然見えませんっ」

適当に話を濁そうとする和奏に、斗真はあからさまに不服そうな顔をしたが、そこを突っ込んで仕方ないと判断したらしい。一つ咳払いをして、それから和奏の顔をじっと見据えた。

「どんな仕事か、聞きたいか？」

「きつ、聞きたいです！」

そんな美味い仕事がある訳が無い。胡散臭過ぎる。

そう理解していながら、それでも和奏はその話に食いつかずにはいられなかった。とりあえず聞くだけならタダだ。明らかにヤバそうな話だとしても、聞いてから考えればいい。

身を乗り出す和奏に斗真は薄く笑った。決して穏やかでも何でもなく、釣り餌に目当ての魚が引かかった、という笑顔で。

「俺の恋人役だ」

「……………はい？」

たっぷり数秒の間を置いて、それでも和奏は何の意味もなさなかった一言しか発する事が出来なかった。

何だ今の台詞は。これは少女漫画かドラマか、それともハーレクインロマンスか——なんて考えが一気に和奏の脳裏を猛スピードで過っていく。

「えっと…………あの、主任。すみません、今何て？」

「俺が二百万払ってやると言ってるんだ。その代わり、俺の『恋人』になってくれ。…………ビジネスライクな関係で」

「俺が二百万払ってやると言ってるんだ。その代わり、俺の『恋人』になっしてくれ。……ビジネスライクな関係で」

そんな斗真の言葉はなかなかエキセントリックだった。和奏の呼吸を五秒ほど止めてしまふ程度には。

ぴったり五秒間、思わず息をする事を止めた和奏は、ハッと気付いたように慌てて呼吸を再開した。驚愕する間ずっと息を止めていたら死んでしまう。けれども、人間がするべき当然の事である呼吸の存在を忘れてしまうほどに、今の斗真の発言は衝撃的だったのだ。その言葉の真意を測りかね、和奏は探るように斗真の顔を見た。何だか口元に笑みを浮かべてはいるが、それでも冗談を言っているような顔には見えない。

和奏はしばらくどう返すか迷った挙句、思った事をそのまま口に出す事にした。考えても分からないものは分からない。妙な誤解が生じる前に、さくつと意味を訊いてしまった方が確実だ。

「……あの、主任。質問があるんですが」
「何だ」

「ええと、どうして『恋人』なんでしょうか。あと『ビジネスライクな恋人』ってのがよく分からないんですが」

斗真の提示した『仕事』の内容で引かなかったのがその二つだ。恋人になっしてくれ、という彼の言葉は愛の告白でない事は充分に分かる。だが、それならば何故そんな『仕事』を提示したのだろうか。ビジネスライクというのも益々分からない。

和奏の質問に斗真は一つ頷くと、はあっと重い溜息と共に吐き出すように言った。

「鬱陶しいんだ」

——鬱陶しい。

一体何がだろつか。和奏は首を傾げながら続きを促す。

「と、言いますと？」

「誰とは言わないが、うちの部署で四人、秘書課に二人、営業部に一人、あと……何だったか忘れたが、とにかく困るんだ。言い寄ってくる女子社員が」

「あー……モテますもんね、主任……」

その言葉で和奏も彼の言わんとする事を理解した。高身長で見た目も宜しく国峰グループのお坊ちゃんだというこの独身男に言い寄る女は実に多い。誰が言い寄っているのか、片手程度なら和奏でも即座に名前を挙げられるほどだ。

つまり、そういった女子社員の虫除けとして『恋人』の存在が欲しいという事らしい。

「成る程。何となく分かりました。でも、それなら本当に彼女作っちゃえば済む話じゃないですか」

「馬鹿言え。それが嫌で、言い寄ってくるのを適当にあしらってるんだろつか」

「あ。それもそっか」

社内の女性は却下なのか、それとも単に恋人を作る気が無いのか。社外で付き合っている女が居る訳ではないから恐らく後者なのだろうが、草食系と呼ぶよりは単純に仕事以外に興味が無いというように見える。だから恋人は作らないのだろう。

かと言って、恋人も居ないのに断り続けるのにも限界がある。一人振ってもまだ次が居るからだ。

斗真はブラインドの隙間から外を見下ろしている。窓の外は、もう殆ど夜の群青色に染まっていた。

「念の為に言っておくが、お前に頼むのはあくまでも『恋人のフリ』だけだ。別に肉体関係を強要したりはしないから安心しろ」

「はあ……」

身体を買われる、という訳ではないらしい。和奏は僅かに安堵する。

「それから期間は無期限だ。無期限と言うのは俺にとって都合のいい期間だが、永久という訳じゃない」

「つまり、契約のせいでいつまで経っても私が本当の恋人を作れない、って訳じゃないって事ですね」

「作る気があるのか？」

「いや、今は無いですけど……一応、傷心真っ只中ですし」

それでもそれなりに長い期間付き合った彼氏が消えたばかりなのだ。既に彼に対しての好意もあまり残ってはいないが、新しい恋人を作ろうとは思わない。否、思えなかった。

寧ろ当分の間、男は要らないという心境だ。それを思えば、ビジネスでの恋人というのは悪い話ではないかも知れない。新しい彼氏は作らないのか、などと突っ込まれる可能性も無くなるだろう。対外的には新しい彼氏が出来たと言えるのだから。

「どうだ？　悪い話じゃないと思うが？」

「うーん。そりゃ悪い話じゃないですけど……」

和奏は唸りながら難しい顔で考え込む。何せ、二百万という大金がかかっているのだ。あまり簡単に結論を出してしまうのは良くない。

借金の返済の代わりに彼の恋人を演じる。それが斗真が提示してきた内容だ。肉体関係は強要しない。けれど、期間は無期限。それなりに人気のある斗真の恋人を演じるという事で、若干社内からの風当たりは強くなるかも知れないが、和奏にとってはそれは割とどうでもいい事項だ。メンタルが強い事には自信がある。

寧ろ、相手が苦手意識のある斗真というのが、和奏にとってはなかなかの悩み所だった。こうして対峙して話しても、眼鏡の奥の眼光が鋭い彼は、やはり少し怖い。

そして和奏はふと或る事に気付き、その疑問を素直に口にした。

「と言うか逆に、主任にあんまりメリットが無いんじゃないですか？」

「俺のメリット？ 何故だ？」

「だって二百万ですよ二百万っ。それだけあったら某浦安の夢の国のホテルの一番いいスイート、四泊も出来ちゃうんですよ！？」

「詳しいな」

「いつか泊まるのが夢なんです！ …… って、そうじゃなくて！」
思わずノリツツコミしてしまい、和奏は少し気恥ずかしそうに「ええと」と言葉を繋ぐ。

「とにかく、女子社員の虫除けに恋人の真似っこをして、それで二百万とか……。主任に分が悪過ぎじゃないですか？」

そうなのだ。偽の恋人という程度の役割で二百万では、斗真の方が割に合わない。

二十九歳の独身男ならば或る程度の蓄えはあるだろうし、そうでなくても国峰グループの人間だと言うのだから、自由になる金もそれなりにあるのだろうが。だからと言って、やはり二百万は割高過ぎではないだろうか。

そんな和奏の指摘に、斗真は肩を竦めながら言った。

「そうでもないさ。相手がお前だからな」

「何ですそれ。どういう意味ですか」

普通ならば心ときめく台詞かも知れないが、今の彼の言い方からそんな甘い意味ではない事は容易に分かる。彼の言わんとしている事を読み取るようにじっと見つめる和奏を、斗真は真っ直ぐに見つめ返した。

そして彼は、

「羽山は俺を苦手にしているだろう」

と、努めて冷静に言った。

その瞬間、和奏の背筋を冷たい汗が伝い降りていく。

「……ぎくっ」

「おい、擬音を口で言っな」

「いや、何かもうそんなにバレバレだったら、いつそ茶化した方がいいんじゃないかなあって、あははは……はは……は……」

——そうか、バレていたのか。

あまり表に出さないように気をつけていたんだけどな、だって怖いんだもの——などと考えながら、和奏は愛想笑いをした。高めの笑い声が休憩室に虚しく響き渡り、そして段々と消えていく。

やがて困った和奏が完全に黙ったのを見計らい、斗真はまるで気にしていない様子で口を開いた。

「あくまでも契約だ。ビジネスライクを基本にしたい。途中で本気にされちゃたまらないからな。それならいつそ、俺を苦手だと思っている相手の方が都合がいい」

「ううん、成る程。そりゃ理にかなってますよ、ねえ……」

確かに、契約という名称で恋人を演じて、やっぱり本気で好きになっちゃいました本物の恋人になりましょう、などという話になっちゃったら、それは結局駆逐しなければならない他の女たちと何も変わらなくなってしまう。

それに和奏はこの上司の事を苦手にしているが、別に嫌っている訳ではない。威圧感や鋭い目つき、遠慮の無い喋り方が怖いというだけだ。生理的に嫌悪感があるという事も決して無い。

「それで？ どうする？ 別に返事は今じゃなくてもいいが、出来るだけ早い方が羽山にも都合がいいだろう？」

促すような斗真の言葉に、和奏は考えて考えて考えて、そして——静かに頭を下げた。

「宜しくお願いします」

背に腹は代えられない。会社を辞めずに借金を早く完済出来るのなら、恋人のフリぐらい何て事は無い。何だかんだで彼氏は蒸発して傷心中な訳だし、新しい恋を探す元気も無い。それならいつそこの契約に乗るべきだろう。

はつきりとそう言った和奏を見て、斗真は、
「契約成立、だな」

と、満足そうに口端を吊り上げて笑った。

「ちなみに一ついい事を教えてやろう」

「いい事？」

何ですか、と和奏は首を傾げる。

「今回のお前みたいなケースだと、警察に行くのが普通だ」

「警察？ いや、でもまだ壮絶な取り立てとかに遭った訳じゃないんですか……」

「だが、羽山の元恋人は蒸発して、それでお前が借金を押しつけられたんだらう？ 普通、知り合いが姿を消したらまず警察に行くだらうが」

「あー……」

—— そりゃそうだ。

アキラは独り暮らしだった。彼の実家は勿論、彼が姿を消した事など知らないだらう。そうすると普通、届け出を出すのは恋人だった自分の役目ではないか。

探さないでくれ、という伝言があつたのと借金の事で頭がいっぱいになり、警察の事など頭からすっかり抜け落ちていたが、やはり然るべき所へ届け出るべきだったのだらうか。勿論、これが家族だったなら間違いなく届け出ていたのだが。

「と言うか、警察って借金問題解決してくれるんですか？」

「警察は民事には介入しないさ。だが失踪届は出せるだらうし、弁護士ぐらいは紹介してくれるんじゃないか？」

寧ろ弁護士なら俺の知り合いにもそれなりのが居るが、と彼は続ける。

「まあそんな事はどうでもいい。契約は成立したんだ。今更無効とは言わせないからな」

「うぐっ……」

眼鏡の奥の瞳を細めて微笑む斗真は、何だか悔しいけれども実際に絵になる笑顔で、和奏はこれから先の事を考えて小さく項垂れるのだった。

ビジネスとしての『恋人』の契約が成立した後、斗真は何とその日の内に借金の支払いを全て終えてしまった。

既に十八時も過ぎているし、何も今日でなくてもいいと和奏は言ったが、彼は、

「こういうのは早い方がいい」

と言つて、あつという間に終わらせてしまったのだ。勿論それは和奏としてはありがたい事ではあつたが、同時に、この男は一体どういう人間なのだろうかと僅かばかりの恐怖を覚えてしまった。もっとも、恐怖は元々抱いていたものではあるが。

「ありがとうございます」

深々と頭を下げ、和奏は礼を言った。すると斗真は何か考える様子で自らの顎を擦り、難しい顔で口を開いた。

「羽山」

「はい？」

「過ぎた事はあまり言いたくないが、お前の元カレ、本当にろくでもない駄目男だな」

何力所もの消費者金融を回った後でそんな事を言われると、最早、和奏には返す言葉も無い。

「えーと……そうですねえ」

ははは、と乾いた笑いを漏らしながら曖昧に告げると、彼は「まあ、どうでもいいが」と溜息混じりに呟いた。そんな駄目男を彼氏にしていたような駄目女だ、とても思われているのだろうか。否定出来ないのが悲しく虚しい所だ。

実際の所、和奏は自分でもアキラとは何度も別れるべき局面があったと思っていた。ギャンブル癖が発覚した時、それをやめてくれと頼んでもやめてくれなかった時、彼が借金をした時、そして連帯

保証人を頼まれた時。それらの事態に遭遇した時、それでも彼と別れる事を選ばなかったのは自分だ。

好きだったから。

どうしようもない駄目男でも、優しくったから。

けれど、アキラが目の前から消えてしまった事で、その感情がずっと溶けていくように自らの胸から薄れていったのもまた事実だ。一体自分はこれまで、彼とどんな時間を過ごしてきたのだろうか。それが分からなくなった。

「しかしまあ、肩の荷が下りたって顔をしてるな」

不意に斗真にそんな事を言われ、和奏は首を傾げる。

「え、そうですか？」

「ああ。お前、ここ数日間ずっと死にそうな顔をしてたからな。非常に辛気臭かった」

「……そりやどうもすみません」

そこまで落ち込んだ顔をしているつもりは無かったのだが、そう見たのだろうか。もっとも、二百万の借金を抱え、会社を辞めようと思っていた所だったのだ。死にそうな顔で辛気臭いオーラを出していたとしても、それは当然の事だろう。

「別に謝る事も無いけどな。事情が事情だし、仕方ない事だろう」

「はあ……」

「それより羽山。『契約』は明日からだ、大丈夫か？」

「大丈夫です。ちゃんと分かってます」

和奏の返答に斗真は満足そうに笑った。厭味の無いその笑顔は、これまでに和奏が見た事の無いものだった。

「ならいい。宜しく頼む」

「はい、宜しく願います！」

これは仕事だ。やるからにはきちんとやり遂げなければならない。その決意を自らにも言い聞かせるように、和奏ははっきりと大きな声で返事をし、深く頭を下げた。

「カナ、今日お昼どうする？」

昼休みの時間になると、柔らかなウェーブがかった髪を揺らしながら小塚彩夏こづかあやかが和奏のデスクまでやってきた。

彼女は和奏より二つ年上の同期だ。和奏が短大卒業で入社したのに対して、彩夏は大学卒業で入社した。今年で三年目の付き合いになるが、社内の人間で下の名前で呼ぶのはそれぞれ互いしか居ないほどに、気の合う同僚だった。

「お弁当持ってきてないから、食堂か外に行こうと思ってるよ」

「そつか。じゃあ外行かない？」

「いいよー」

暑いのでサッパリと蕎麦でも食べよう、という話になり、和奏は彩夏と共に会社近くの蕎麦屋に向かう事にした。レディースセットについてくるサクサクの桜エビのかき揚げが美味しい店だ。

ビルから一步外に出ると、むわっとした熱気が二人を襲った。暦の上では秋の筈だが、東京の九月はまだまだ暑い。さっさと蕎麦屋に入って空調の利いた店内で涼みたい、などと話しながら歩きだした所で、和奏は不意に低い声に呼び止められた。

「羽山」

「あ、主任」

一瞬だけ和奏は身を硬くしてしまう。彼との『契約』は今日から履行されているからだ。

「今の内に言っておく。今日、仕事終わったら待ってけ。飯食いにいくからな」

「へっ？」

和奏はポカンと口を開けた。その隣で彩夏も同じような表情をして、和奏と斗真を交互に見遣る。斗真は言うだけ言うと、和奏の返

事も聞かずにそのまま立ち去ってしまった。

取り残された女子二人は、揃って同じような顔をしたまま立ち去る斗真の後ろ姿を見送っていたが、彩夏の方が先に我に返り、和奏の腕を掴んで思いきり揺さぶった。

「ちよつと、どういう事よ。あんた、あれだけ主任怖いだの主任苦手だの主任は鬼だの言ってたじゃないっ。一体いつの間に……！」
「わわっ、彩さん落ち着いてっ」

「これが落ち着けるかっての。じっくり話聞かせて貰うわよ？」
腕を掴まれたまま、和奏は彩夏にずるずると引き摺られるようにして歩いていく。

そのまま蕎麦屋まで直行した二人は、揃ってレディースセットを注文し、それから斗真との関係について話す事となった。とは言え、勿論『契約』については秘密の為、色々とお付け合いです事になった、というような曖昧な説明になってしまう。彩夏はそれでも納得したらしく、出されたお茶を一気にぐいと煽った。

「それにしても分からないものねえ。全っ然気付かなかったわ」

彩夏は、はー、と尾を引く長い溜息をつくが、そんなものは気付かれなくて当然の話だ。実際に昨日まで二人の間には上司と部下というだけの関係しか無かったし、和奏はあの上司の事を怖いと思っていた——思っている——のだから。

「まあ元々、主任ってカナの事は気に入ってたばいけどさ」

「えっ、嘘だ」

「嘘じゃないわよー。主任が女子社員で苗字呼び捨てにしてんの、あんただけじゃん」

「……そうだったけ？」

「そうよ。あたしも小塚さんって呼ばれるし、皆、さん付けで呼んでるのにカナの事だけは羽山って呼び捨てだから、なーんか他と違うのかなあって思ってたもの」

言われてみればそんなような気もする。二人の間に実際は恋愛関係など無い事を踏まえると、単純にナメられているのだろうか。

そこへ注文したセットが届けられる。カラッと揚がったかき揚げは、見ているだけでも口に入れた後のサクサクとした音が聞こえてくるようだった。手を合わせて割り箸を割り、つゆに薬味を入れながら、和奏はやや気まずそうに彩夏の顔を見た。

「で、まあその……あんまり人に言わないで欲しいっていうか……」

「分かってる分かってる。バレてったら仕方ないけど、そんなもんまり表沙汰にしたいくないもんね、社内恋愛って」

「うん。ありがとう、彩さん」

もつとも、斗真は和奏の存在を他の女性への牽制として使ったものだろうから、表沙汰になるのも時間の問題なのだろう。こうして彩夏の居る場でああいう風に夕飯を誘ってきた事からもそれは分かる。

ただ、まだその辺りの事についての詳細を話している訳ではないし、周囲に話が洩れていくのであれば、それは恐らく和奏からではなく斗真からの方が良いだろう。とりあえず、今はまだあまり話を流布させない方がいい。和奏はそう考えた。

彩夏は蕎麦をすすり満足げな顔で咀嚼すると、にんまりと口元を歪めた。

「んー。しっかし、やるねえ、このお」

「彩さん、何か言い方が親父っぽい」

「うっさい。でも主任ってばさ、確かに怖いけどイケメンだし仕事出来るし実家はお金持ちだしで、女性社員の憧れじゃん？ よくあの人捕まえたね。狙ってる子、結構多いって話はカナも知ってるでしょ？」

こくこくと和奏は頷く。正にその狙ってる女たちを一掃する為に偽の恋人になりました、本当は恋愛関係なんて全然ありません、とは口が裂けても言えない。

「それに、あたしは安心してんのよ」

「安心？」

「ほら、カナの前の彼氏ってさ、何かあんまりこう……だったじゃ

ん？」

「……ああ」

彼女の言いたい事を察して、和奏は曖昧に苦笑いを浮かべる。

彩夏はアキラがギャンブル癖が激しいという事を知っていた。以前二人で飲んだ時、調子に乗って和奏が飲み過ぎてしまい、その時に彩夏に「彼がギャンブルをやめてくれない」と泣きついたのだ。

流石に彼が借金をしてまでギャンブルを続けているという事は話していないが、彩夏はその話を聞いて以来、あまりアキラに対して良い印象を持っていなかったらしい。

「主任ならギャンブルとかまず無さそうだしさ。社内の女の子にあれだけアピールされても、なかなか靡かなかったって事を思うと、女性関係も大丈夫っぽいじゃない？ 単に社内恋愛が嫌なのかなーって思ってたけど、カナと付き合うつて事はそういう訳でも無さそうだし」

「う、うん。そうだね」

「だから本当に良かったわ。安心した」

多分、彩夏は本当に純粹に喜んでくれているのだ。笑顔で「良かった良かった」と言う彼女を見て、和奏は自身の良心がチクリと痛むのを感じた。

元カレが借金こさえたまま蒸発して、それを主任が肩代わりしてくれて、逆にそのお礼として恋人を演じるという仕事を請け負いました——と言えたならどんなに楽だろうか。

そんな複雑な心境ごとまるっと呑みこむように、和奏は桜エビのかき揚げにかぶりつく。揚げたてのサクサクとした衣は実に美味だった。

仕事が終わりに、斗真の言いつけ通りに彼を待っていた和奏は、そのまま彼の車に押し込まれた。「食べられない物はあるか」と問われ「虫以外なら何でも行けます」と即答する和奏に、斗真は愉快そうに口元を歪めた。

そして気付くと、二人は小洒落たイタリアンの店に着いていた。

コース料理を注文する斗真と注文をとるウェイターは顔見知りのようだった。どうやら彼はここの常連客らしい。車で来ている為に食前酒を断った彼に付き合い、和奏も酒は飲まない事にした。気にするなと言われたが、上司が飲まないのに気にしない方が無理だ。

出されたレモン水をぐいっと煽った和奏は、正面の眼鏡男子目を細めて見遣った。

「あの、これっていわゆるご飯デートってやつじゃないですか？」

「そうとも言えような」

「ビジネスライクな契約恋人なのにデートとかするんですか」

会社の女子たちを遠ざけるのが目的ならば、わざわざこうして外で夕飯を食べる必要など無いのではないか。よく分からない、という顔を見ると、斗真もグラスに口をつけながら澄ました顔で言った。

「興信所を使われている可能性があるんでな。それなりに恋人の真似ことはして貰う」

「興信所？」

はて、会社の女子社員に興信所など使う人間が居たのだろうか。彼を狙う女子は相当数居た筈だが、そこまで手の込んだ事をして彼を調べようという女は流石に居ないだろうと思うのだが。やはりよく分からない。

そんな事を考えている内に前菜が届いた。一枚のプレートの上に乗った、モッツアレラチーズとトマトとバジルのカプレーゼ、生ハ

ムのサラダ、魚介のマリネ。皿の上の美しい色彩は、視覚だけでも充分に満足させてくれる出来だった。和奏はまず最初にカプレーゼを口に運んだ。オリーブオイルと塩と胡椒というシンプルな味付けのそれは、口の中で瑞々しいトマトの味わいが広がり実に美味だった。

「美味しい！」

「だろう？」

素直に和奏の口から出た感嘆の言葉に、斗真はふっと笑った。当然だ、とでもいうように。

「この店主は高校時代の友人でな。店の規模はあまり大きくはないが、常連客に芸能人も居る程度には人気だそうだ」

「えっ、そうなんですか？ 凄い」

常連客に芸能人、と言うとそれだけで一種のステータスのように感じる。一般人の脆弱な想像かも知れないが、少なくとも和奏にとってはそうだった。

——しかし、高校時代、か。

この男の高校時代などさっぱり想像がつかない、と和奏は思う。昔からこのような威圧感のある男だったのだろうか。それとも成長するにつれ、だろうか。

しかし彼は国峰グループの子息だという話だし、金持ちは大抵こういう威圧感を持っているものなのかも知れない。

——あれ？ そういえば。

そもそも、彼が国峰グループの子息だというのは本当の話なのだろうか。前菜をもしやもしかと口へ運びながら和奏は考える。実に今更な事ではあるが、和奏自身、その話は又聞きでしか聞いた覚えが無いのだ。

折角いい機会だし訊いてみようか、いやでも訊いたら嫌な顔をされるだろうか、嫌な顔をされたら怖いし——などと様々な考えを巡

らせた拳句、和奏はそれを訊いてみる事にした。和奏は一度気になりだしたらどうにも途中で止まらない性質の女だった。

「あの、主任」

おずおずと呼びかけると、斗真はフォークを使う手を止め、静かな瞳で和奏を見た。

「呼び方」

「え？」

「俺とお前は『恋人』だろう。仕事じゃない時は呼び方を変えろ」

「って言われまして……」

いきなりそんな事を言われても、一体どうすればいいのか。和奏は困ったように口籠るが、斗真はお手本を示してくれる気は無いらしい。

「ええと……国峰さん」

とりあえず役職から個人名に変えてみる。だが、目の前の彼は眼鏡の奥の瞳を細め、渋い顔をした。

「恋人だと言っただろう」

今までずっと『主任』呼びだったのだから、苗字呼びは充分恋人らしいと思うのだが。どうやらそれでは駄目なようだ。

ならば他にどう呼べば、と考え、和奏は次に浮かんだ呼び名を口にする。役職じゃなくて苗字にさん付けでも駄目なら、後は立場的に浮かぶ呼び名といったら。

「国峰先輩」

斗真の顔は益々渋くなる。その顔が正直な所少し怖くて、和奏は「あはは」と苦い愛想笑いを浮かべた。全くちつともさっぱり全然これっぽっちも誤魔化せていないようだ。

「おい待て、何故退化する」

「退化って言われまして、うーん……」

「俺の下の名前は斗真だ」

はあっと深い溜息と共に吐き出された彼の声に、和奏は動きを止めた。

つまり、下の名前で呼べ——と？

いやそれは流石にどうだろう、と和奏は躊躇する。本当に恋仲な訳でもないのだし、立場としてはあくまでも上司と部下、或いは雇い主と雇われた側になる訳だ。

しかし彼を雇用主だと考えるならば、その指定に従って然るべきなのだ。

「と……」

最初の一文字を声に出す。斗真は呼ばれるのをじっと待っているようだ。

「斗真、さん……？」

彼の名前を読んだ後、何故だか無性に気恥ずかしい感情に襲われ、和奏はごくりと唾を呑む。そういえば男性の事を下の名前で呼ぶなど、この数年間でアキラ一人ぐらいしか無かったのではなからうか。和奏の声に斗真はようやく満足そうな笑みを浮かべた。

「ああ。合格だ、和奏」

そして斗真も至極当然の事のように、和奏を下の名前で呼んだ。彼の低い声で名前を呼ばれるのは酷く新鮮な響きがして、和奏はマリネを纏めてフォークに突き刺すと口の中に放り込んだ。気恥ずかしさを食べ物と一緒に咀嚼して飲みこんでしまおうというつもりで。

「えっと、しゅに……斗真さんってあの国峰グループの御子息、なんですよね？」

適度に冷静さを取り戻した和奏は、とりあえず先程から気になっていた事を訊く事にした。

「それがどうかしたのか」

「いや、その話って本当なのかなあって。噂はいつぱい流れてますが、ご本人からそういう話を伺った事が無かったんで」

あれだけ大量に流れているのだから、流石に嘘という訳は無いのだろうが。けれども本人の口から聞いた訳ではない話を、事実なの

だと断定する事は出来ない。

斗真は成る程と呟いた後、

「まあ国峰は国峰だが、うちは分家だからな」

と、何処かつまらなさそうな顔で応えた。

「へえ、そうなんですか」

「そうだ。だから金目当てで俺に近付いても何もいい事は無いぞ。持つてないって事も無いが、本家と比べりゃ雲泥の差だ」

「……………」

——それでも二百万払って頂きましたが。

とは言わない。和奏の場合は、あくまでもビジネスだからだ。無償ではなく、代わりに仕事を提示されているのだから。言ってしまうえば、和奏は彼に二百万で買われたようなものだ。

そこへパスタが届く。トマトソースのサッパリしたスパゲッティは、するすると口の中へ運ばれていく。この後メインディッシュの皿も来るらしいが、ここまでの料理が美味なので次への期待も自然と高まっていく。

さっきの話の続きですが、と前置きをして和奏は続けた。

「別に斗真さんに言い寄ってくる女の人、みんながお金目当てって訳じゃないと思いますよ」

「半分ぐらいはそうだよ」

「半分ぐらいはそうかも知れませんが、あと半分ぐらいはそうでもないと思います」

「じゃあ何だ。顔か」

自分の顔の造形がいいという自覚があるのだろう。そんな斗真の堂々とした——或る種ナルシズムを感じる——発言に、和奏はあからさまに顔を顰めた。

「……………うつわ」

「おい、聞こえてるぞ。聞こえてなくても顔が相当だぞお前」

「すみません。どう突っ込もうか考えていたら、それよりも先に顔と声が勝手に」

「全く……冗談と本気の区別ぐらいつけろ」

「冗談のつもりだったんですか！ 全然笑えないんですけど！」

「お前な」

「だってリアルですもん。その顔で、自分の顔目当てとか言っちゃ
うと」

実際に斗真の顔の造形はかなり良い部類に入る。そうでもない顔
ならば、逆にどうしても突っ込みようはあるのだが、顔通りの発言
をされるとどうにもならない。

しかし、今のが冗談のつもりだったとは。まったくもって笑えな
い。もっとおちゃらけた感じに言ってくれたなら、まだ冗談だと分
かり易いの。もしかしたらこの男はこういう喋り方しか出来ない
のかも知れないな、と和奏は思った。

食事の後、財布を出そうとした和奏はその動きをサラリと斗真に
封じられてしまった。

「元々飯に誘ったのは俺だろう。誘っておいて、女に金を払わせる
のは主義じゃない」

勿論、最初に誘ってきたのは彼なのだが。彼は上司で自分は部下
な訳だが。けれど、彼にはつい昨日二百万もの借金を返済して貰っ
たばかりなのだ。せめて飯の一回ぐらいはこちらが出した方がいい
のではないだろうか。

「でも流石に悪いですよ、それは」

「いいから。タダメシ食えてラッキー、ぐらいに思っておけ」
「……んむ」

そんな軽いテンションでいいのだろうか。瞬き二回分ほどの時間
を和奏は思考を纏める事に費やし、それから一つ頷いた。

「まあ、それもそっか。じゃあご馳走様です！」

また次に何かの機会があったら、その時は自分が出す事にしよう。

和奏はそう考えた。契約が続く以上、きつとこうして夕飯を共にする事は今後もあるのだろっし。

「……呆れるぐらい単純な奴」

「何か言いました？」

「いや別に。何でも無いさ。行くぞ」

斗真はエスコートするように扉を開き、和奏に先に出るよう促す。彼の隣をすつと通り抜け、和奏は店の外に出た。

彼の車に向かいながら、隣を歩く男の顔を見上げて和奏はぼんやりと考える。

思えばこの二日間、驚くぐらい彼とたくさん話した。入社してからの三年間で交わした会話よりも、寧ろこの二日間の方が会話量が多いのではないか、と思ってしまうほどだ。

こうしてじっくり話してみると、それほど怖い相手でもないのかも知れない。分かりにくいが冗談も言うようだし。顔つきが怖いとか喋り方が怖いとか何だか威圧的に感じるとか、そんな事は自分が気にし過ぎていただけだったのだろうか。

何にせよ、きつと先は長いのだ。少しでも親しめる方が契約恋人の仕事はやり易いに決まっている。

無理をせず少しずつ慣れて行こう、と和奏は思った。

明日出掛けよう、と言われたのは『契約』が始まってから二週間ほど経った頃だった。既に、暦は十月になっていた。

見たい映画があるから付き合え、という話だ。それはいわゆるデートではないのか、と和奏は思ったが、会社の外でもそれなりに恋人の真似ごとをすると予め聞いてはいたので、特に驚きはしなかった。以前彼が言っていた「興信所を使われている可能性がある」というのが一体誰の事を指しているのかは分からないが、その可能性がある以上はこういう事も必要なだろう。

和奏はとりあえず無難そう且つお気に入りの花柄ワンピースを選び、会社に行くよりも少し念入りにメイクをして、待ち合わせである駅に向かった。待ち合わせ時刻の五分前に着いた和奏は、既に着いていたらしい斗真の姿を見つけると慌てて駆け寄った。

「おはようございます！」

いつもの挨拶をするがもう昼だ。少し合わないかも知れない、と思ったが、

「ああ、おはよう」

と、斗真も普通に返してきたので、気にしない事にした。

「すみません、お待たせしちゃいましたか」

「いや。俺もさつき着いた所だし、まだ時間前だしな」

言いながら斗真は腕時計で時間を確認する。和奏も一緒にその盤面を覗き込んだ。待ち合わせ時刻のぴったり五分前だ。

そこで和奏はようやく、改めて斗真の今の姿を確認する事が出来た。いつもよりも多少無造作にセットされた髪、カットソーの上にネイビーのカーディガン、デニムに普段よりもカジュアルな靴。会社で会う彼よりも少し若い印象の男が、そこに居た。

「どうした？」

ぼうつと呆けたように見入る和奏を不思議に思ったのだろう。斗真は怪訝な顔で問うてくる。

「えっ？ あ、いいえ」

和奏は慌てて首をブンブンと振った。スーツ姿しか見ていないと、こういう時に結構グツと来るのは仕方の無い事だ。

「えっと、主……斗真さんの私服、そういう感じなんですね」

「おかしいか？」

「いえ、全然。ただ私服の想像がつかなかったんで、もしかしたらスーツで来たりするのかなと」

「あのなあ、お前は俺を何だと思ってるんだ」

プライベートが全く想像出来ない人です——とは口にしない。まあまあ、と曖昧に和奏が濁すと、斗真は眼鏡のブリッジを押さえながら溜息を一つ吐き出した。それから彼は、和奏の頭から足元までさつと一瞥した。

「そのワンピース」

「え？」

「いいじゃないか。似合ってる」

あまりにもさらりと褒められ、和奏は一瞬状況を理解出来ず、次にぎゅっと心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚えた。この男はこういう事を口にするのか。言いそうにないタイプだと思っていたのに。

「あ。ありがとうございます……」

何となく恥ずかしくなり、軽く視線を下に向ける。同時に、自分も素直に「格好良いですね」と言っただけならば良かったのに、と少しだけ自らの発言を悔んだ。

サスペンステイストの映画を見終えてお茶でもしようという話になり、二人は映画館に併設している施設のカフェやレストランの並

ぶフロアをぐるぐると歩いていた。

やがて一つのカフェの前で斗真の足が止まる。ディスプレイに並ぶ色とりどりのパフェ。どうやらそのカフェは甘味に特化した店のようだった。美味しそうだ、と思う和奏が隣に目を向けると、彼はそのディスプレイを食い入るように見つめていた。

——おや、これは。

「もしかして、パフェ食べたいんですか？」

思った事をそのまま訊ねてみると、彼はハツとしたように首を振った。

「いや別にそんな事はないが」

「思いつきりじーつと見てましたよ」

あれだけ釘づけになっておいて「そんな事はない」は無いだろう。先程斗真がパフェを見ていたような眼差しで、和奏は彼を見つめる。すると、少しだけ気まずそうに顔を逸らされた。

「よし、入りましょう、折角だし！」

「おい、ちよっ……」

斗真の腕をぐいと引っ張り、和奏はやや強引に店内へ足を踏み入れた。斗真は口では抵抗するような素振りを見せたが、実際には小柄な和奏に大人しく引き摺られる形を取った。

ウェイトレスが笑顔で迎え入れ、席に案内する。着席と同時に和奏はメニューを開いた。自分ではなく、正面に座る斗真に向けてだ。彼は複雑そうな顔をしていた。

その内、ウェイトレスが水を運び、注文を取りに来る。

「えーと、私はチョコレートパフェ。それから斗真さんはマンゴーパフェですか？ さっきじつと見てたの」

「……抹茶パフェ」

「じゃ、抹茶パフェお願いしますー」

半ば無理矢理に注文を済ませてしまうと、斗真も諦めた様子で肩を竦めた。何処か慚然としたような顔にも見えるが、きつと気のせいではないのだろう。

ウエイトレスが注文の確認をして立ち去った後、溜息混じりに水を口にした斗真を見て、和奏は小さく笑った。こんな風に自分が優位に立っている状況は初めてではないだろうか。上司と部下、雇い主と雇われの身、だけれどもそう思うと少しだけ面白い。

「食べたいなら食べたいって素直に言えばいいのに」

「いや、別に俺は食べたいとは……」

「抹茶パフェに決めてたんでしょ？ 食べたいって事じゃないですか。……でも意外でした。いつもブラックコーヒーを飲まれてたんで、あんまり甘い物は好きじゃないのかと」

「まあ、コーヒーはな。それに、俺が甘い物が好きというのはイメージじゃないだろう」

「成る程、確かに。……ふふっ」

最近はスイーツ男子という言葉もあるほど、甘い物を好きな男性も増えてきたが、斗真はそれでも自分のイメージを気にするらしい。少々時代錯誤な所もあるなと思いつつ、それが案外可愛らしい行動に見えて和奏は思わず含み笑いを漏らしてしまった。

「何がおかしい？」

「いやいや、そういうイメージを気にしてるとか、案外可愛い所もあるんですね」

「っ……」

和奏の言葉に斗真はゲホゲホと咽込んだ。照れているのだろうか。

そうこうしている内に、和奏の前にはチョコレートソースのたっぷりかかったパフェが、斗真の前には白玉や小豆で装飾されたパフェが届けられた。和奏は突き刺さっているポツキーでクリームを掬って口に運んだ。甘い。小腹の空いてきた身体に染み渡る。

斗真も抹茶アイスを口に運ぶと、心なしかほっとしたような表情をした。やはり甘い物が結構好きなのだろう。そういった部分がチラチラと見えてくると、少し可愛いと思う。

「……あのですね。ちょっと怒られるかも知れない事、言ってもいいですか？」

「ん？ 何だいきなり」

「結構慣れてきたから言っちゃいますけど、実は怖いなって思ってたんです、斗真さんの事」

「怖い？」

「ほら、契約成立の日に『苦手としている』って話が出たじゃないですか。あれ別に嫌いとかそういうんじゃない、ただ単純に威圧感があって怖いっていう……」

苦手としているからこそ、彼は和奏を選んだのだと言う。勿論それだけでなく、ああいう特殊な状況に陥ったから、というのがそもその理由ではあるだろうが。

「お前、そういう事は普通本人には言わないものだぞ？」

呆れ顔で斗真が言くと、和奏は頷いた。

「そうですね。普通言いませんけど、私たちの関係って普通じゃありませんし。あと今のは前置きですから。今はもう怖くないです。

案外喋り易いし、結構可愛い所もあるんだなって分かったし」

「……………」

どう返答すべきか迷ったように斗真は複雑そうな顔で和奏を見つめ、そして結局何も言わず、生クリームを口に運んだ。可愛いதாக若干気に喰わない発言もあったが、そこに反論するのは何だか子供染みている、と彼は考えたようだ。

「でも斗真さん、会社でもこんな感じでいればいいのに。そうすればもっと親しみ易いと思いますよ。って、親しみ易くなったら今よりもっと女の人が群がってくるかも知れないけど」

「それじゃあ意味が無いだろうが」

溜息と共に吐き出すように言う斗真に、まあ確かに、と和奏も同意する。

「まあどうしたって、仕事とプライベートは違うからな」

「今はプライベートなんですか？」

「女と映画見てパフェを食う事の、一体何処が仕事なんだ？」

「私は一応『契約のお仕事』なんですけど」

「お前はな。俺は違う」

それは確かにそうなのだが。何処か釈然としないものを感じて、和奏は唇を尖らせた。

「……何かずるくないですか、それ」

「何がずるいんだ？ 俺は雇用する側、お前は雇用される側だろう。それだけの話だ」

「まあそうなんですけど……うーん」

和奏は難しい顔をしたまま首を捻る。

てつきり斗真も仕事のつもりなのかと思いきや、プライベートなのだと言われて少し得をしたような気分になりつつ、何故そこで自分が得をしたような気になるのか分からないまま、しかし和奏はやはり契約の仕事をこなしているのだという状況。和奏の中には、何とも不可思議なこの状況を、一体どう処理すべきなのか悩む部分があるのかも知れない。

「ほら、むすつとした顔をするな。白玉一個、分けてやるから」

「えっ、わーい」

「……本当に単純だな」

ぽつりと呟かれた斗真の言葉には、和奏は聞こえないふりをした。それは、自分が餌付けに弱いという自覚があったからだった。

「国峰さん、今度飲みに行きましょうよお」

トイレに向かおうとしていた所、廊下の先から不意に甘ったるい声が聞こえ、和奏は足を止めた。この声はええと誰だっけ——と脳内で社内の人間の顔を思い浮かべていくが、パツと当てはまる顔が出てこない。

少しだけ様子を伺うようにチラツと廊下の向こう側を覗いてみると、営業部の女性社員が熱烈なアプローチをしている所だった。『ネット販売部の主任』に対して。

「うわ……」

嫌な所に遭遇してしまったな、と和奏は思う。このまま何事も無かったかのように通りすぎていくか、それとも引き返すか。しかし引き返しては、和奏は自分の目的場所まで辿り着けない。さっさと目前の二人が解散してくれば、それに越した事は無いのだが。

そのまましばらく様子を伺っていると、やがて斗真がやんわりと断り始めた。出来るだけ穏やかに、相手との間に波風を立てぬように。そういうアプローチをもっとザックリ斬ってしまえばいいのだろくに、何故彼はそうしないのだろうか。仕事に関する時はビシバシと厳しい人なのに。それも人と上手くやっていく為の処世術なのだろうか。

その内、諦めた様子の女性の方が先に姿を消した。それを見送った後、斗真が大きな溜息を吐き出したのが見え、和奏はようやく廊下を進む事を許されたように感じた。

「お疲れ様です」

「……羽山」

「相変わらずおモテになりますね、主任」

社内での呼び方は以前と変わらぬままだが、主任、という単語を

わざと強調して言ってみせる。少しトゲのある言い方になってしまったかも知れない。

和奏の言葉に斗真は苦笑した。

「お前、一体何処から見てたんだ？」

「飲みに行きましようよお、って可愛く誘われてる所から」

「ほば最初じゃないか」

ならさつさとこっちに來てくれれば向こうだって退いたろうに――と彼は呆れたように言う。そんな事を言われても、流石にあの状況で気にせず出ていけるほど和奏は無神経ではなかった。

「いつもあんな風にやんわり断ってるんですか？ もっとビシバシ『行かない』『迷惑だ』ぐらい言っちゃえばいいのに」

「それが出来れば苦労しないさ。だが人間関係ってのはそんなに簡単なものじゃないだろう。それに……」

くいと眼鏡を押し上げ、斗真は和奏を見下ろした。二十センチ以上高い所から見下ろされると多少の威圧感がある。

「お前という切り札をいつ使おうか、まだ状況を読んでいる所だからな」

――切り札と来たか。

一体自分がいつどのような状況で使われるのか、和奏だってそれは勿論気にしている事だ。しかし、そんなに大層なものでもないのだが。

昼休み、化粧室から戻ってきた和奏の机に見覚えの無い物が置いてあった。個包装されたパウンドケーキだ。

「あれ。何だろう、これ」

「ああ、それ岡村さんと小山さんの旅行のお土産だって。カナ居なかったから、置いとくからねーって」

斜め向かいから彩夏が声をかける。見れば、今名前の挙がった女

子社員とアルバイトの二名が菓子を配り歩いていた。そういえば今度旅行に行くのだと、先週辺りに話していたのを聞いたような気がする。

「ふーん」

後で礼を言っておこう、と考えながら和奏はそれを鞆に仕舞う。そこへふと、高めの甘い声が聞こえた。朝、廊下で聞いたのと同じようなトーンのものだ。

「主任は甘い物あまり得意じゃありませんでしたよね」

「だから甘くない物と思って……」

見れば、土産を配っていた二人が斗真の席で違う包みを渡していた。甘くない物、らしい。パツと見た感じ、おかきや煎餅といった系統の物の包みのようだ。

「……あの二人、なかなかあからさまだねえ」

彩夏は目を細めながら、和奏にしか聞こえない程度の声でぼそりと呟く。

「うん」

普通、甘い物が得意でないから、といってわざわざ一人だけ別の物を買ってきたりはしないだろう。余程親しくしている相手ならともかく、そういう訳でもないのだ。その行動の裏に隠された感情は、あまりにも見え透いていた。

その上、彼女たちのあの気遣いは無意味なものだった。斗真は本当は甘い物が好きなのだから。そのまま皆に配った物と同じ物を配れば良かっただろうに。

そんな彼女たちを見て何となく複雑な気持ちになり、和奏は誰にも気付かれぬようにそっと溜息をついた。

別にムカムカなどしていない。イライラもしていない。何ともない。

ただ少し、ほんの少しだけ、何故だか面白くないような気持ちが浮かんた。この気持ちは一体何だろう。嫉妬だとか、そういう類のものではない——筈なのだけれど。

「羽山さん電話ですー」

「あ、はいっ」

不意に名前を呼ばれ、和奏は現実引き戻される。良く分からない焦る気持ちを抱えていてもどうしようもない。仕事モードに切り替えなければ。

和奏は自らに活を入れるように、パシッと両膝を強く叩き、受話器を手に取った。

「お電話替わりました、羽山ですー」

「……分かってましたけど、斗真さん本当にモテますよね」

暗い車の中、窓の外を流れ行く景色を横目にしながら、和奏はポツリと呟いた。突然の言葉に、運転席の斗真は一瞬だけ助手席に視線を寄越した。

「何だ唐突に」

「あの営業部の人もですし、岡村さんと小山さんも……。普通、皆に配る物が苦手だろうからって、わざわざ特別なお土産買って来りませんよ」

隣の男がモテるという事は和奏も充分に知っているつもりだったが、こうして改めてそれを意識してみると、本当にやたらモテていた。あんな風に、角を立てないようにとやんわり断っているとは知らなかったが。

「まあ確かに、わざわざ買ったりはしないだろうな。少なくとも俺ならしない」

「ですよ」

会話が途切れる。それ以上をどう続けたいいのか、和奏には分からなかった。

休みの前日は共に夕飯を食べに行く事が何となく習慣づけられて、もうどれぐらい経ったろうか。まだ一ヶ月は経っていない筈なのだ。

が。今日もその習慣通りに食事に行き、そして今は食事をした店から和奏の自宅に向かう途中だ。

美味しいご飯を食べた直後は和奏のモヤモヤとしていた気分も晴れたのだが、少し落ち着いてくるとやはり何だか胸の辺りがつかえたような気になってしまった。

一体何がこんなに引つ掛かるのだろう。一体誰がどれだけ斗真に言い寄ろうが、本当に彼と付き合っている訳でもない和奏には、関係の無い話だ。だから誰が彼を好きでもどうでもいい筈なのだ。

だけど、それが出来ない。

何故だかモヤモヤして、面白くない。

そうこうしている内に、車は和奏の自宅アパートの前に到着した。礼を言つて車を降りようとした和奏は、その前にふと思い出したように呟いた。

「あ、そうだ。忘れてた」

和奏は鞆の中を漁り、目当ての物を見つけると運転席に向かって差し出した。

「どうぞ」

すい、と差し出されたその包みを見て、斗真は珍しく目を円くする。

「……何だ、これは」

「お昼に貰ったパウンドケーキです。食べたくないんですか？」

「いや、食べたくない事はないが……」

それは昼間、約二名が配っていた土産だった。「いいのか？」と続ける斗真に和奏はこくりと頷く。

昼間のモヤモヤした気持ちはまだ引き摺っていた和奏は、このよく分からない燦る感情を抱えながら、貰った物を食べる気にはなれなかった。別にパウンドケーキに罪は無いが、彼女たちが配っていた物を何となく口に入れたくない気分だった。それならば、甘い物が好きな彼に渡すのが一番だろうと思ったのだ。

和奏の手から包みを受け取った斗真は、少し考えた後にその場で

包みを開封した。

「——和奏」

「はい？」

「口開ける」

「へっ？」

いきなり何を、と怪訝な顔をする和奏に、もう一度「口を開ける」と彼は繰り返す。仕方なく言われた通りに口を開けて待つと、斗真は包みから取り出したパウンドケーキを一口大に千切り、それを和奏の口に押し込んできた。

「美味しいか？」

口に放り込まれた物を咀嚼すると、爽やかなオレンジの香りがふわっと広がった。それをごくんと飲みこんでから和奏は頷く。

「ん……ん、美味しいです」

「そうか。じゃあ安心して食えるな」

「えっ、ちょ、どういう意味ですか。私、毒見役ですかっ？」

自分を指差しながら騒ぐ和奏を横目に、斗真も一口分を千切って自らの口に運んだ。彼は眼鏡の奥の目を細め、満足そうな顔で咀嚼している。

「って言うか、ずるいですよ」

「ずるい？ 何がだ」

「私も斗真さんにあーんやります。ほら、ケーキください」

和奏はずいと手を差し出すが、斗真はそれに応じず、彼女に触れさせぬようにとケーキの包みを反対側へ運んでしまう。

「丁重にお断りする」

「えー。やられるだけって恥ずかしいんですよ？」

「一人で恥ずかしがってる。俺はわたわたしながら口ポカーンと開いたお前の顔で、しばらく思い出し笑いをしてやるから」

「意地悪！ 鬼畜！ 変態！」

「お前、上司に対していい度胸だな」

斗真は苦笑交じりにそう言って、小さく続けた。

「充分元気だな。心配して損した」

「え……？」

心配——と聞こえたような気がしたのだが。あまりにもサラッと流されてしまい、それ以上を和奏に突っ込む事は出来なかった。

そんなにモヤモヤした気持ちが顔に出ていたのだろうか。それは宜しくない傾向だ、と思いつつ、けれども今の斗真の行動が彼が自分を元気づかせようとしてくれた事だとしたら、それが何故だか無性に嬉しくて。

車を降りる時に後ろ髪ひかれるような想いになってしまったのは、きっと今のように気を遣わせてしまった事が申し訳無くて、でも嬉しかったからなのだろう。

そしてこの一週間後、二人の関係はあっさりと周知のものになる。

『詳しい事は明日話すが、今日羽山と付き合っていると公言した。明日からそれらしく振る舞うように』

そんなメールが届き、自宅で夕飯のオムライスを今まさに口に運ばんとしていた和奏は、スプーンを手から落としてしまった。乾いた音が響く。

「は……？」

携帯のディスプレイに向かい一人呟く。当然の事ながら返事は無い。

どういう事ですか、と返信を打ちかけて、和奏はそれを消した。詳しい事は明日話す、と向こうが言っている以上、きっと今訊いても斗真は話してくれないだろう。

分かりました、と物分かりの良さそうな無難な返信をして、改めてオムライスにスプーンを突き立てる。ふわふわのタンポポオムライスは、卵二つに生クリームとバターたっぷりの高カロリー食だ。このオムライスはアキラの好物で、何となく彼の事を思い出すから最近作るのを控えていたのだが、あれから一ヶ月以上経ち傷も癒えてきたのでそろそろ作ってみるか、と思い立ち久々に作った物だった。

つい数秒前までウキウキしながらこのオムライスを食べようとしていた和奏だが、今のメールで、先程までのその浮かれた気持ちが無処かへ飛んで行ってしまった。

付き合っていると公言した？

一体誰に？

どういう状況で？

そもそも何故今このタイミングで？

考え出すと気になって気になって止まらない。考えた所で恐らくあまり意味は無いし、最初からいずれこうなる事は分かっていたのだから、もうどうしようもない訳だが。

「それらしく振る舞う、って言ってもなあ……」

「どうやったら『それらしく』なるのだろうか。付き合っているのか、と問われたらそれを肯定する程度でいいのか。

「……まあいつか。なるようになる。うん」

自らに言い聞かせるように呟き、スプーンに掬ったふわふわ卵とチキンライスを纏めて口に放り込む。美味だ。カロリーを気にしなければ最高の食べ物だ。

何故、世の中の美味しい物は揃いも揃って高カロリーなのだろうか。そんなどうでもいい事に、和奏は意識的に想いを馳せる事にする。そうでもないかと、斗真の事ばかりを考えてしまいそうだったからだ。今は考えても仕方のない事なのだから、一度、意識的に脳内から追い出すようにしなければ。折角の上出来オムライスを、余計な事を考えながら食べて堪能出来ないのは勿体ない。

テレビをつけると丁度グルメ番組がやっていた。焼き肉を頬張るタレントの満足そうな笑顔を見ながら、やはり高カロリー食は美味しいものなのだと和奏は改めて考え直した。

「で、どういう事なんですか」

昼休み、会社から徒歩五分ほど離れた位置にある公園まで呼び出された和奏は、ベンチで隣に座る斗真を早速詰問する事にした。

朝からこの時間まで、和奏はチクチクと突き刺さるような視線を浴びっぱなしだった。分かっていた事だしどうでもいいと言えばどうでもいいのだが、

——国峰さんって羽山さんと……。

——えー、マジマジ？

——マジらしいよ。でもどうして……。

という声まで聞こえてくる以上、全く気にしないという訳にもいかない。

それにしても、たった一日でどれだけ浸透するのだろうか。昨日、彼が一体どんな状況で『公言した』のかは知らないが、女社会のネットワークというものはなかなか恐ろしいものだという事を、改めて考えさせられる。

斗真は何処から話したのかと思案した顔で数秒黙り込み、それから口を開いた。

「名前は伏せるが、昨日或る社員に告白された。だから最初、お前の名前は伏せた上で付き合ってる奴が居ると言って断ったんだ。そうしたら『それって羽山さんですか？』と返されてな」

「えっ！ どうして！」

ふんふん、と話を聞いていた和奏は不意に声を高くした。一体何故そこで自分の名前が出てくるのだろうか。

「何でもお前が俺の車に乗り込んだのを見たらしいぞ」

「あ……あ……」

「どうも俺が帰りに女を車に乗せるなんて有り得ない事だそうだから、お前の名前が出たんだろう」

「成程、そりゃ確かに道理ですね……」

口元に手を当てながら和奏は考え込む仕草を見せた。

確かにこの一ヶ月、二人は定期的に斗真の車で食事に行っていた。会社の駐車場から出ているのだから見られても別におかしくはないが、まさかその事がこう作用してくるとは。

黙りこくって考える和奏を見て、斗真は困っていると判断したのだろう。彼は、

「不満か？」

と訊ねた。

予想外のそんな問い掛けに和奏は目を円くする。

「え？ ああいえ、別にそういう訳じゃ……」

「元々、こうする為の『恋人役』なんだ。文句は言わせないからな」
「分かってます、大丈夫です。ただ、やっぱり案外見られてるもんなんだな、と思ったただけなので」

「まあ、そりゃあな」

この返事を聞く限り、斗真は目撃される事を前提に意図的に動いていたようだ。直接的に伝えるよりも、まずはそういった目撃情報で信憑性を高めておく事が大事だ、とでも思ったのだろうか。その辺りの彼の考えは和奏には分からないが、少なくとも今回はそれが有効に働いたようだった。

「それでだ。無いとは思うが、もしも何か妙な事をされた場合はすぐに言え。いいな？」

妙な事、というのは嫌がらせの類だろう。和奏は素直に頷いた。

「はい。分かりました」

とは言え、周囲に居るのは流石にいい歳をした大人だ。嫌がらせなどは無いと思いたい。

これからしばらくの間、多少は耳が痛くなる事もあるだろうが、時が過ぎれば周りも次第に飽きていくだろう。その程度の事ならば、最初から覚悟済みなので大して辛くはない。気にはなるけれど。

寧ろ、そういった事を請け負うのも当然の契約だと思っていたので、斗真がそこを気にかけてくれたという事の方が、今の和奏にとっては驚きだった。

「バレたわね」

仕事が終わわり、帰宅の為に会社から駅に向かう途中、彩夏が溜息混じりに言った。

「うん。バレちゃったみたい。凄いね、あつという間に話が広がっ

ちゃって……社内のネットワークって怖いよ」

あはは、と力無く笑って返す。彩夏には出来るだけ秘密にしてくれと頼んでいたのだが、本当にその通り誰にも洩らさなかったらしい彼女に対しては、ほんの少しの申し訳無さがあった。

夕暮れから夜の藍色に変化する街並みを、二人は並んで歩いていた。

陽が落ちると少し肌寒さを感じる。彩夏は一つに纏めて縛っていたウェーブの髪をほどいた。寒かったのかも知れない。雑踏の中、行き交う人の服装が少しずつ厚手になっている事を確認し、本格的な秋の訪れを和奏は感じていた。

「しばらくの間は、ちょっと周囲の視線が気になるかも知れないけどさ。あんま気にしないようにね」

「ん、分かってる。大丈夫。ありがとね、彩さん」

氣遣うような言葉をかけてくる彩夏に、和奏は頷いた。既に今日の段階で、やや周囲の目が気になるものである事を、彩夏も気付いていたようだった。誰かに直接問われる事は無かったが、社内に居た女たちの目が「本当に付き合っているの？」と言っている事は明白だ。

「堂々としてなよ。何言われたって、結局カナが勝ち組なんだから」

「勝ち組って……」

「だってそうでしょ？ 主任が選んだのはカナなんだし」

彩夏は勝気そうにつり上がった瞳を細め、和奏を励ますように微笑んだ。しかし実際の所、和奏は別に勝ち組でも何でも無いのだ。和奏と斗真はあくまでも、契約で結ばれた偽物の恋人なのだから。

「まあでも、結果としてバレて良かったかも知れないわね」

「え？」

やや意外な言葉が聞こえ、和奏はふと隣を歩く彼女の顔を見た。

「だってこれで主任にアプローチかける女も……居なくなるとは断言出来ないけど、数がグッと減る事は目に見えてるでしょ？ そうしたら、カナもやきもきする必要無くなるじゃん」

そう言った彩夏は、ふつと表情を翳らせた。

「辛いからね。周りに内緒の恋愛って」

普段、明るく強気な表情ばかり浮かべている彩夏が、こんな風にしおらしく苦笑を浮かべる所など、和奏はこれまでに見た事が無い。そういえば、和奏は彩夏の恋人の話の詳細を聞いた事は無かったように思う。付き合ってからそんなに長い彼氏が居るらしい事は知っているが、それ以上の話を聞いてはいない。彩夏が自ら話してくる事が無かったし、あまり話したくなさそうな空気を纏っていたからだ。

「……彩さん？」

大丈夫？ と続けて訊くと、彩夏はすぐにいつも通りの笑顔で「ごめん、大丈夫」と答えた。

もしかしたら、彩夏の恋愛も周囲には言えない彼女なりの事情があるのかも知れない。誰にだって一つや二つ、抱えている秘密はあるものだ。和奏に聞く事の出来る話ならば和奏は喜んで聞くが、彩夏が話してこない以上、それは和奏の踏みこんで良い領域ではないのだろう。

——秘密、か。

自分の秘密もそれなりに大きいのだが、と和奏は思う。

彩夏は同じ会社の人間だ。吐き出したくとも流石に出来ない。そもそも契約内容は口外してはならないものなのだし。

それでも何処かで誰かに吐き出せないだろうか。一人でずっと抱えるのはそろそろ辛い。そんな事をぼんやりと考えていた和奏の携帯に、その日の夜、旧友から数ヶ月ぶりのメールが届いた。

——和奏、今度久しぶりにご飯でも食べない？

——いいよ。しずちゃんの都合のいい日、教えて。

そんな感じにあっさり旧友と約束を交わしてから数日。待ち合わせ場所に、帽子に黒縁眼鏡という出で立ちで現れた友人を見て、和奏はこそそと彼女の方へ駆け寄った。

しずちゃん——宮塚^{みやづか}しずくは、小学校の時から和奏の友人だ。昔から歌が好きだった彼女は、今では若い女子に人気のシンガーソングライターとして第一線で活躍している。だから目深に被った帽子も、顔立ちを誤魔化すような黒縁眼鏡も、彼女には必要なものだった。

「あ、和奏！」

「しずちゃん、お疲れー」

「お疲れ。冬以来だったつけ、久しぶりね」

「うん。あ、とりあえずお店行こう」

すらりとした長身のしずくと並ぶと、155センチの和奏は少し小さく見える。今日のしずくは7センチあるヒールを履いているので、更に和奏よりも高くなる。和奏は小学生の頃からこの友人の身長に憧れていた。背が低い方が女の子らしくていい、と言われる事もあるが、155というのは実に中途半端な背丈だと思う。

予約を入れていた個室の居酒屋に入り、さくつとドリンクの注文を済ませる。それが届くと二人はグラスを手を取った。和奏は蜂蜜梅酒を、しずくはカシスオレンジを。カン、と高い音が響きグラスが重ねられる。

「あのさあ、しずちゃん。早速なんだけど、王様の耳はロバの耳なの」

「は？」

会社の人間には話せない事だ。幾ら彩夏が親しくとも、やはり洩らす事は出来ない。けどもう限界だ。誰かに聞いて欲しい。

不思議そうな顔をするしずくに、和奏はこの一ヶ月間で起きた事を全てぺろっと吐いてしまった。

「何それ、ドラマみたい」

全部聞き終えたしずくが最初に零した感想が、それだった。実的確な感想だと思う。

「そのドラマみたいな事が現実にあったんですよ……って言うか、現在進行形なんだけど」

和奏はぼやきながら唐揚げを口に運んだ。衣がサクサクとした唐揚げは、噛むとじゅっと肉汁が溢れてきた。はあっと溜息をつく和奏を前に、しずくはサラダを食べながら、

「でも和奏、それって上手くやれば玉の輿に乗れるんじゃない？」
と言った。

「玉の輿って……しずちゃん、あのねえ」

「だってそうじゃない？ 国峰グループのお坊ちゃんなんですよ？」
「でも分家だよ」

「分家っていったって国峰よ？ それ絶対捕まえておくべきだと思うわ、私は。今はビジネスだけど、そこから本当の愛に発展しないと限らない訳でしょう？」

それはしずくが斗真を知らないから言える事なのではないか、と和奏は思う。異性に興味を持つている様子が全く見受けられない彼と、本当の恋愛に発展する事などまず無いだろう。

この一ヶ月間、自分は斗真の割と近くに居たと思う。そして近くで彼を見てきて思ったのだ。やっぱりこの男は本当に彼女を作る気

など無いのだと。和奏から見ても結構良い女だと思う女性のアプローチにも全く靡かず、そして先日のアレだ。和奏と付き合っているのだと周知のものにした。

「いやー、無いと思う。あの人に限って」

「分からないわよ。和奏、頑張ってみたら？ 毎週食事にも行ってるんでしょ？ 自分をアピールするいい機会じゃないの」

あの男に対して一体何をどうアピールしろと。難しい事を言う。

渋い顔で黙り込んだ和奏を見て、しずくはくすりと笑った。

「でも安心だわ。前の彼氏、何だか危ない気がすると思ってたから彩夏に言われたのと同じような事をしずくにも言われ、和奏は複雑そうな顔をする。

「……それ、会社の人にも言われた」

「ま、そうでしょうね。って言うか、借金残して蒸発とか本当に口くな男じゃなかったわね。別れて正解よ、それ」

嘆息しながら言うしずくに和奏も頷いた。確かに口くな男ではなかったのだ。今となっては、もう恨む気持ちすらも無いけれど。

ただ、自分がアキラと付き合ってきた数年間は一切何だったのだろう、とは思ってしまう。彼を好きだったけれど。その気持ちに嘘は無いけれど。その結末がこれではあまりにも報われない。今更考えても仕方のない事ではあるが。

和奏はチーズフライを口に運びながら、とりあえず話を変える事にした。

「って言うか、しずちゃんはどうなの？」

「どうって？」

「遠距離の彼氏くん。パティシエ目指してるんじゃないっけ」

「ああ、うん。とりあえず洋菓子店に就職決まったのよ」

「わあ、そりゃめでたい」

「それでこの間、就職祝いに旅行に行ってきたの。ちょっと和歌山までパンダ見に。写真あるけど見る？」

「見る見る」

身を乗り出す和奏に、しずくは携帯を操作して差し出した。ディスプレイにパンダと戯れる青年の写真が表示されている。

「あー、やっぱ高梨さんに似てるねー」

「そりゃ兄弟なもの」

しずくの彼氏の兄は有名バンドのボーカリストだった。携帯のディスプレイに映る顔は、兄と良く似ている。数ヶ月前、しずくはそのボーカリストとの熱愛報道を週刊誌に書かれていたのだが、実際の熱愛相手は一般人である弟の方なのだからお笑い草だ。

和奏は最初、彼らが二人で写った物は無いのだろうかと考え、直後にそれは無理だと思い直した。しずくは芸能人だ。普通のカップルのように、通りすがりの誰かに写真を頼む事は難しいだろう。

「ありがと。でもいいなー、旅行かぁ」

しずくに携帯を返しながらうつとりと呟く。和奏は今までに一度も、彼氏と旅行に行った事など無かった。アキラと付き合っていた頃も近場のデートばかりで、勿論それはそれで楽しかったのだが、こうして近しい人間の話を聞くと羨ましい気持ちがいよいよ出てきてしまうのだ。

「和奏はその人と旅行とか行かないの？」

「あのねしずちゃん、あくまでも偽恋人なの。ビジネスだから」

「でも話を聞く限り、相手の人も満更でもないんじゃないのかしら、和奏の事」

「え……」

今までの話を聞いて、何故満更でもないとしずくが判断したのか、和奏は理解に苦しむ。自分が選ばれたのは借金の話があった偶然と、そして彼に対して苦手感情を抱いていたからこそだ。確かに定期的に食事には行くが、それも契約の一環だ。

難しい顔で和奏が考え込んでいると、しずくは更に畳み掛けるように言葉を重ねてきた。

「って言うか、和奏はどうなのよ？」

「へっ？ 何が？」

「どう思ってるの？ その人の事」

「どうって……」

「好きじゃないの？」

「……………」

あまりに単純且つ明快なその問い掛けに、和奏は益々難しい顔をした。

——好き？

——あの人を？

斗真の顔を思い浮かべる。和奏から見ると大きな体躯に、すらりと長い手足。賢そうな顔を彩る眼鏡と、その奥に見える切れ長の瞳。正直な所、自分が隣に並ぶと不釣り合いだと和奏は思っていた。

威圧感のある——悪く言えば偉そうな喋り方。仕事に対する厳しい姿勢。けれど、甘い物を好きな自分を悟られたくないというやや子供染みた所があつて。ただの契約恋人の筈なのに、和奏の事を気にかけてくれる所もあつて。

考え出すと分からなくなる。和奏はふるふると首を横に振り、誤魔化すように笑った。

「い、いやいや。だってほら、私、一応元カレの傷を引き摺ってる訳でねっ」

「本当に？」

しずくはじいっと和奏の瞳を覗き込むように見つめてくる。心に浮かぶ戸惑いをすぐに見破られてしまいそうで、和奏は思わず目を逸らした。

元カレの傷を引き摺っている。その言葉は嘘ではない。嘘ではないのだが、引き摺る度合いがかなり軽減されてきているというのも、また事実だ。強がりでも何でも無く、アキラの事はどうでもいいと考えるようになっていたし、そもそも最近はアキラの事を忘れる時間も多かった。

だけど分らない。

あまり考えたくない。

そもそも斗真は、本気になられては困ると言って、自分を苦手としているであろう和奏を「都合が良い」と指名したのだ。だからきつとこれは考えてはいけない事なのだろう。

これが契約である以上、和奏が彼を好きになっても無駄なのだ。

— 8 — (後書き)

ちよつと番外編的な話でした。

ムーンライトノベルスで連載していた「終わらない愛の歌を」も宜しく願います。と、宣伝します。(笑)

次から少し話が展開します。

しずくと食事をした日から、和奏の脳内に新たな疑問が芽生える事になった。

——自分はある男を好きなのか？

いやいやそんな。まさか幾ら何でも流石にそれは。と自らに言い聞かせるが、正直な所よく分からなくなっていた。考えるという行為自体がそもそも無駄であるその事象について、それでも考えずにいられない。

しかし、もしも斗真を好きだとして、それを彼に悟られてはならない。悟られたらそれが最後、契約が破棄になってしまいかも知れない。好意を抱く女を駆逐している斗真にとつて、仮に和奏も好意を抱くようになったとしたら、それは駆逐すべき他の女たちと何も変わらない相手になってしまふのだから。

そんな或る日。

いつものように共に夕食に、と会社を出た斗真と和奏の前に、いつもの日常では居ない筈の人物がやってきた。

「何か食べたいものはあるか？」

「うーん、そうですねえ」

そんな話を話しながら、いつものように駐車場へと向かう。社内で二人が付き合っているという噂が流れてからしばらくは、やや周囲の視線が気になってはいたが、数日過ぎると皆も飽きたらしくそんなに注目を浴びなくなってきた。そんなものだろう。

「あ、じゃあ最初に連れてってくれたイタリアンのお店がいいです」
「あそこか。分かつ……」

不意に斗真が言葉と共に歩みを止める。

二人の目の前に、セーラー服の少女とスーツ姿の男が立っていた。どういふ関係性かは分からないが、何やら慣れた様子で話をしてるので知り合いなのだろう。

桜を模した校章バツジのついたセーラー服は、お嬢様学校で有名な桜林女学院のものだ。陶磁器のような白い肌と対照的な長く艶やかな黒髪を持つ少女は、ぱっちりとした黒目がちな瞳を長い睫毛で彩り、可憐な雰囲気纏っていた。

「わ、可愛い子……って、斗真さん？」

隣の男が表情を固くしたのに気付き、和奏は首を傾げる。

「とうとう、おいでなすったか」

諦めにも似たトーンの呟きに、和奏は更に不思議そうな顔をした。

——おいでなすった？ 誰が？

不意に、セーラー服の少女がこちらを見た。その表情が見る見る内に明るくなっていく。彼女はプリーツスカートの裾を翻しながら、和奏たちの方に向かい小走りに駆けてきた。

「斗真くん！」

そして呼んだ。渋い顔をする眼鏡の男の名を。

「えっ？」

その甘い声に和奏は思わず隣の男を見上げた。トウマケン、と発音されたその名前は、間違いなくこの男のものだ。つまり、お嬢様学校の制服に身を包んだこの美少女は、斗真の知り合いという事になる。

斗真は一つ小さな溜息をつくと、口を開いた。

「みやこ都子……」

「近くまで寄ったから来ちゃった。会えて良かったわ！」

朗らかに笑いながら、一片の邪気も無いようなトーンで言う少女は、都子という名前らしい。当然のように下の名前を呼び捨てた斗真とこの少女は、一体どのような関係なのだろうか。

訝しがる和奏に気付き、都子と呼ばれた少女はぺこりと頭を下げた。その動きに合わせて、艶やかな黒髪がはらりと肩から流れる。

「会社の方かしら。初めまして、国峰都子と申します」

——クニミネ？

その単語に、和奏の脳内に浮かぶ疑問符が次々に数を増していった。同じ苗字という事はもしかや兄妹なのだろうか。しかし、彼に妹が居るという話は聞いた事が無い。自分が聞いていないだけかも知れないが、記憶違いが無ければ確か彼は一人っ子だった筈だ。

和奏が一人で状況を整理しようと思えこれ考えを巡らせつつ、礼儀として自分も自己紹介を返さなければ、と口を開きかけた所で、斗真がそれを制するように一歩前に出た。

「都子」

「なあに、斗真くん」

「こちら、羽山和奏さん。会社の部下で——俺の彼女だ」

その斗真の言葉を聞いた瞬間、都子の表情がピシリと凍りついた。「……え？」

時間までも凍りついたようだった。都子が斗真と和奏の顔を交互に見遣り、そして——笑う。

「ま、またまた。斗真くんってば嫌だ、面白くないわよその冗談。そんな事言ったらそちらの方にも失礼でしょう？」

「冗談じゃないんだ。今、将来も視野に入れて、彼女と付き合っている」

その言葉に今度は和奏の表情が凍りつく。今この男は、将来も視野に入れて、と言わなかっただろうか。契約で恋人なのは構わないが、契約で婚約にまで話が発展すると流石に諸々面倒臭い事になるのではなからうか。

しかし現状、和奏に発言権は無さそうだ。色々と突っ込みを入れたい気持ちをグツと堪え、大人しく斗真の一步後ろで黙ったままにいる事にする。都子の後ろに控えているスーツの男も、困ったような顔をしながら黙ったままだった。

「……み」

か細い声が聞こえた。声の主であると思われる都子は、その小さな手でぎゅっと拳を作り、ふるふると震わせている。

「認めないわ！ わたし、そんなの絶対に認めないんだからっ！」
そして高らかに宣言した彼女は、踵を返すとそのまま走り去っていった。現状を冷静に把握出来そうもない今は、一旦帰るという選択肢が一番適したものではあるのだろうが、しかし「認めない」とは穏やかでない事を言う。

都子が走っていったのを見て、後ろに居たスーツの男も慌てて踵を返した。

「あつ、お嬢様！ すみません斗真様、失礼致します！」

——お嬢様？ 斗真様？

スーツの男は斗真に頭を下げ、都子の後を追うように駆けていく。残された斗真は深い溜息をつき、和奏は呆然として走り去る彼らを見ていた。会社付近ではあるが、関係者には見られていなかったようだ。

「あの……今の彼女、国峰つて……？」

やや固まった表情のまま隣の男に問い掛ける。彼は「頭痛がする」と小さくぼやいてから、眼鏡を押し上げながら言った。

「イトコなんだ。国峰本家の」

「一番避けたかったのはあいつなんだ」

「……はあ」

連れられたイタリアンレストランで向かい合って座った斗真は、何だか妙に疲れた顔をしていた。

国峰都子。 齡十八の彼女は斗真のイトコだった。 国峰本家のご令嬢ならば、お嬢様学校と名高い桜林女学院の制服を着ていたのも納得がいく。 国峰の名に恥じぬ才色兼備である彼女は、昔からずっと

斗真と結婚すると息巻いていたのだという。

「あの、すみません。ちょっと質問が」

「何だ」

「一番最初のご飯デートの時、興信所使われてるかも、みたいな事言っていましたよね？　もしかしてそれって……」

「都子だ」

「デスヨネー」

思わずカタコトになってしまう。国峰グループ本家のお嬢様となれば、興信所ぐらいバンバン使っていても何もおかしくはない。しかし、都子が和奏の存在を知らなかったという辺りで、結果的に興信所は使っていなかったようだ。

「でも、そもそもどうしてあんな状況になったんですか」

「どうして、と問われると返答に詰まる所ではあるが……」

そして彼が話した事は、至極簡潔な話だった。それは昔々の物語。まだ三歳だった都子と中学生だった斗真の、他愛のない日常の会話。

——みやこ、とーまくんのおよめさんになる！

——そうだな、都子が大きくなったらな。

——うん！　はやくおおきくなるから、そしたらとーまくん、みやこをおよめさんにしてね！

「そんな事言っただんですか！」

「三歳の子供の言う事は流石に無碍にはしないで同調するさ。当時の俺はまだ中学生だったが、昔から慈悲深く優しさに満ち溢れた男だったんでな」

「……嘘ばっか」

「何か言ったか？」

「あつ、いいえ！　何でもありませんとも！」

「まあそんな冗談はさて置き」

——冗談だったのか。

やはりこの男の冗談は冗談に聞こえない。もつとおどけて言うとか、何か別の手法を覚えた方がいいのではないだろうか、と和奏は思う。

「子供の『お嫁さんになる』発言なんて、年を取れば普通は風化していくものだろう。だが、都子はそうならなかった」

確かに、幼少の頃のそんな発言をいつまでも引き摺る人間は居ない。否、もしかしたら居るのかも知れないが、それはとても珍しい分類としてカテゴライズされるべきだろう。それぐらいに希少な存在だ。

その希少な存在が、都子だった。

「今はまだあいつも高校生だからと言って何とか抑えているが、このままだと高校を卒業したら、本格的に婚約に向けて動き出しかねない。それを阻止したかったんだ」

「婚約って……そんなの嫌だって言えばいい話じゃないですか」

「出来るだけ波風は立てたくないんだ。極力、都子の方から諦めるように仕向けない」

溜息混じりにそう言った斗真の声には、疲労の色その他に憐憫と僅かの申し訳無さが滲んでいるように聞こえた。

何か事情があるのだろうか。自分から「嫌だ」と言い出せない事情が。向こうが本家の人間、斗真が分家の人間だという以外にも、どうやら他に理由がありそうだ。

「……これは、俺の責任でもあるからな」

苦笑しながらそう言った彼の言葉の意味は、その時の和奏にはまだ分からなかった。

それからというもの、国峰都子はちよくちよく和奏たちの会社に現れるようになった。斗真の話によれば、彼女はお嬢様らしく複数の習い事を掛け持ちしているらしい。その為か、毎日やってくるといふ事は流石に無かったが、それでも彼女は相当な頻度で来るようになっていた。

そして和奏の顔を見るなり、こう言うのだ。

「羽山さん、早く斗真さんと別れてくだらない？」

「どうせ今回もただの遊びですもの」

「わたしは貴方の為を思っ言っているんです」

「傷は浅い内の方がいいですよ？」

「だから、早く斗真さんと別れてくださいな」

傍若無人にも程がある。そんな台詞の数々を、彼女は和奏に向かって告げてきた。

元々、和奏と斗真が共に帰る日は殆ど無く、大抵は和奏の方が少し早目に会社を出ていた。だから和奏が一人で居る所を、或いは彩夏など他の誰かと居る所を捕まえてそう言うのだ。そしてその後、都子は何食わぬ顔で斗真が出てくるのを待っているらしい。熱心な事だ。自分の知らぬ間に和奏という『恋人』を斗真が作っていた事が、余程気に食わなかったらしい。

都子の発言は非常に厭味なものではあるが、凜とした表情で綺麗に背筋の伸びた美少女にそう言われると、苛立ちよりも先に迫力を感じるものなのだと和奏は初めて知った。堂々とそんな無茶苦茶な事を告げてくる都子を見て、世の中やつぱり顔なのか、などと考えるてしまう。それは決して真摯な対応ではないのだろうが、別に和奏

が真摯に対応するべき事でもない。

しかし、和奏はこれが契約だから、あくまでも仕事だからと割り切っているが、そうでなかったら果たしてどうだろうか考える。

都子思っていた以上にしつこかった。流石に「金を出すから別れる」という悪役のテンプレート的な台詞までは吐かなかったが、こんなにもしょっちゅう顔を見せては「別れる」と迫ってこられると、普通の人間ならば多少は気が滅入るのではなからうか。

「タフな子だなあ……友達居るのかな」

後ろからかけられる都子の声を無視するように駅に向かって歩きながら、和奏は溜息混じりに呟いた。

あの性格ではどうなのだろう、友達など居ないのではないか、いやでも斗真が絡まなければ態度が変わるのかも知れない、最初だけはとても好意的だったし、などと余計な事まで邪推してしまう。

「はあ……」

だが、どれだけ別れると言われても和奏にはどうしようもないのだ。

そもそも、和奏と斗真は付き合っすらいない。ただの契約の恋人なのだから。

十月の夜の港はかなり肌寒い。食事をした後にふらりと立ち寄った港は、向かいにビルや工場の灯りが煌めいて、イルミネーションのように見えた。

「何と言うか……私が言うのも何ですけど、めっちゃくちや我儘です、ね、あの子」

タイルで舗装された道を並んで歩きながら、和奏は隣の斗真にそう言った。それはこの数日間、和奏が都子に接してきて思った事だった。

——斗真さんと結婚するのはわたしなんですから。他の方なんて認めません。

その発言を初めて聞いた時、物凄い事を言う女子高生だ、と和奏は開いた口が塞がらなかつた。その事を話すと斗真は渋い顔をした。「あいつ、上に兄が二人居てな。家族に溺愛されて育ったんだ」「成る程……」

家族に溺愛されて育てば、あの我儘ぶりも納得がいく。いつも連れてくるお付きのようなスーツの男にも「早く斗真くんを連れてきなさい」だの「もう少し近くに車を停める事は出来ないの？」だの、色々と無茶な事を言っているように見えた。

面倒臭い。

非常に面倒臭い。

金が関わってなければ今すぐ放り出したいぐらいに面倒臭い。

だが、これは仕事だ。面倒だからといって、途中で放り出す訳にはいかない。

「そういえば前に斗真さん、自分の責任でもある、って言ってましたよね。あれ、どういう意味ですか」

それは先日、彼が言っていた事だ。都子がああなってしまったのは自分の責任でもあるのだ、と。現状を見ている限り、和奏には、特に斗真に何かの責任があるようには思えなかった。

ああその話か、と呟いてから斗真は一つ息をついた。

「うちの両親は俺が中学の時に他界したんだ」

「え……」

それは唐突な言葉だった。話の流れが読めず、和奏はふっと隣の彼を見上げる。レンズの奥に見える涼しい目元は、ぼんやりと海の方を眺めていた。

「事故で二人とも一緒にな。俺には兄弟も居なかつたし、一人きりで遺された訳だ。その後、まだ中学生の俺の面倒を看てくれたのが伯父と伯母——都子の両親だった」

遺された斗真の親戚は都子の両親——国峰本家の人間しか居なかったという。元々家政婦を雇っていた為に家事については心配無かったが、それ以外の様々な面で斗真を助けてくれたのは伯父伯母だった。

「伯父と伯母には面倒を見て貰った恩がある。それを思えば……そう無碍には出来ないだろう。都子の事を。妹のようなものなのだし」これまで斗真が自分から強く都子を拒否出来なかった理由。

それは、自分の世話をしてくれた伯父と伯母に対する義理立てのつもりであるのだと、そういう気持ちから来るものだった。

「だが、結果として俺の責任だ。都子が子供だからと侮っていた。まさかあいつがああ歳になってもまだ本気で俺と結婚しようなんてそんな事を言ってるとは思ってなかったんだ。伯父と伯母に恩があるとは言え、もっと早い段階できっちり都子に言っておくべきだった」

「斗真さん……」

彼を責められはしない。彼にも彼なりの気持ちの動きはあったのだろう。恩人の娘で、まるで妹のような相手に、冷たく接する事など出来やしない。子供の言葉なのだからきつといずれは忘れて、都子も新しく恋をするだろうと、そう考えても当然の事なのだ。

そこまですを聞いて、彼にどう声をかけようか迷っていた和奏は、不意にガクンと自らの身体が大きく傾くを感じた。パンプスの爪先が引っかかり、躓いたのだ。

「うきやあっ！」

大人になって転ぶのは痛いし辛い。せめて打ち身にならないように上手に受け身を——と瞬間的に考えた和奏は、次の瞬間、腕を強く引っ張られた。

「和奏ッ！」

「っと、わわわっ」

引つ張られるままになった和奏は、そのまま軽い衝撃を受けてきゅつと目を瞑った。どうやら転んだ訳ではないらしい。薄く目を開くと、ワイシャツとネクタイが眼前に見えた。

「……ったく。危なっかしいな、お前は」

自分の物ではない香りに包まれる。その香りの持ち主は斗真だ。彼は転びそうになった自分を助けてくれたのだ。そして彼の腕の中に収まった自分の状況を理解した和奏は、顔に身体中の血液が集中してくるのを感じた。

「あ、ご、ごめんなさい。ありがとうございます」

片方の腕を掴まれ、背中に斗真の手が軽く回され、そして和奏の顔は彼の胸元にある。

まるで抱き締められているようなその体勢が酷く恥ずかしくて、和奏は礼を告げながら慌てて斗真から離れようとしたが、彼は何故かそれを許しはしなかった。

「と、斗真さん？」

固まったように動かない斗真を不審に思い、和奏は彼を見上げた。すると彼は、

「……甘い」

と、一言だけ呟いた。

「え？」

何を言っているのだろうか。何が甘いのだろうか。不思議そうな顔をする和奏を見下ろして、斗真は言う。

「お前、香水つけてたか」

「こ、香水ですか？ つけてますけど……あんまり匂わせたくないんで、本当にちょっとだけ」

甘い、というのはどうやら和奏の香水の事らしい。一応嗜みとしてつけてはいたが、職場で強く匂わせるのも品が無い為、和奏のつける量は本当に僅かに香る程度だった。

これまで、斗真とこんなにも距離が近づく事は無かった。だから彼は気付かなかったのだろう。

「もう少し効かせても大丈夫だと思うぞ」

「そう、ですか？」

「ああ。これじゃ全然分かん。……これぐらい、近付かないと」
そう言った斗真は、不意に和奏の項に顔を埋めた。斗真の鼻先が
白い首筋に当たる。彼の呼吸をダイレクトに感じて、和奏は思わず
身を振じらせた。

「ひゃ……っ」

「おい、変な声出すな」

「だ、だっ」

クン、と直接香るようになると、恥ずかしくてたまらなくなる。
けれども腕を掴まれ背中を押さえられ、がっちりとガードされた状
態の和奏には動く事など出来やしない。この状態で彼が喋ると、吐
息が直接首や耳に当たってしまうというのに。

「ん……柑橘系。グレープフルーツか」

「やつ……」

もしかして彼は、わざと息がかかるように喋っているのだろうか。
耳の近くに感じる低い声が直接鼓膜を震わせるのを感じながら、和
奏はびくんと小さく肩を跳ねさせた。

やがて満足したらしい斗真は、ゆったりと和奏の身体を解放した。
よろりと彼の腕から逃れた和奏は、二十センチ以上高い場所にある
その顔を睨み上げる。

「……セクハラです」

「何の事だ」

「セクハラです！ 超セクハラです！」

「ぎゃーぎゃー喚くな。ちょっと確認しただけだろうが」

「うつうつ……」

言葉にならない声を唸りながら、和奏は首の後ろに手を回した。
先程まで斗真が顔を埋めていた部分。彼の吐息を直に感じた場所。

その場所が、何だか妙に熱くて。

物理的なものではない熱を感じて。

困った顔をする和奏の前に、スイと大きな手が差し出された。

「ほら」

「え？」

「また転ばれたらかなわんからな」

彼の言葉と差し出された手の意味を考え、数秒の間を置いて、和奏はその手に自らの小さな手を乗せる。すると斗真は当然の事のように和奏の手を握り締め、歩き出した。

手を引かれながら歩く和奏は、首筋だけではなく繋いだ手からも熱を感じて、その熱さに対して一体どういう判断を下すべきかを悩んでいた。

その日の昼休み、和奏が窓の外を見たのは偶然だった。そこから下を眺めた事も偶然だったし、更に会社の前に都子の姿を発見した事も偶然だった。

「ちよっ……」

和奏は思わず絶句する。何故、彼女がこんな真昼間から居るのだろうか。そしてそれを見つけた瞬間、和奏はエレベーターに向かい駆けだしていた。

一階に着き、急いでビルの外に出る。すると堂々と立っている都子と、相変わらず後ろに控えているスーツ姿の男が和奏に気付いた。「な……何してるんですか、こんな昼間から」
改めて相手の姿を見とめると、考えるよりも先に和奏の口からそんな言葉が出ていた。

だが、何をしているのか、と訊くまでもない。彼女の事だ。きつと斗真に会いにきたのだろう。和奏は答えを聞くよりも早く、質問を被せた。

「と言うか、どうしてこんな時間から居るんですかっ」

「今はテスト期間なんです。それが何か？」

じゃあ早く家に帰って勉強しなさい——と口には出来なかったが、和奏はすかさず心の中で突っ込んだ。学生の本分は勉強の筈だ。少なくとも、社会人のイトコを会社に来て追い回す事ではない。

何と返すべきか和奏が閉口していると、都子は相変わらずの堂々とした態度で言った。

「それよりも、斗真くんを呼んできて下さらない？」

「あの、息巻いてる所申し訳ないんですけど、今日は主任は不在なんです」

あくまでも事務的を装いながら和奏は返答した。昼休みだがまだ業務時間内だ。だから冷静に上司の留守を告げる。

そもそも一体何故、和奏が一人でここまで出てきたのか。それは今告げた理由にあった。今日、斗真は社内には居ない。本日中の帰社予定が無い事から、都子がどれだけここで待っていてようと、それは無駄な話だった。

和奏の言葉を聞いた都子は、きょとした顔を作った。大きな瞳が益々大きく丸くなる。造形がいいせいか、こういう顔をするとなりに愛らしいのがまた和奏を何とも言えない気持ちにさせた。

「立川、^{たちかわ}どういう事？ 確認していないの？」

都子は言いながら後ろの男を振り返る。どうやら先日からずっと彼女に付き添っていた、このスーツの男は立川という名らしい。

立川は何処か困ったように少しだけ眉を寄せた。

「お仕事中だとか迷惑になるから電話での確認は控えるように、と仰ったのはお嬢様ですが……」

「……あ、ああそう、そういえばそうだったわね」

立川のその言葉に、都子は自らの発言したであろう事を思い出したようだった。艶やかな黒髪をさらりとかきあげながら、勿論覚えていたわ、なんて付け足す都子を見つつ、和奏は「天然か」と突っ込みたくて仕方がなかった。

ツメが甘いのはやはり子供だからなのだろうか。迷惑になるから電話は控えよう、としたその姿勢は評価しなくてもないが、それならそもそも会社まで押し掛けてくるのは迷惑ではないのか、とも突っ込みたい。

和奏は、はあ、と尾を引く長い溜息を一つ吐き出すと、何かを決めたように小さく頷いた。このままではラチがあかない。今日この場で帰すだけではなく、今後都子がここへ来ないようにしなければ。

都子が斗真を好きだという事は分かった。幼い頃に抱いたその恋の芽を、ずっと大切に育ててきたという事も分かった。ただ斗真を

好きで彼と一緒にになりたいだけだ、という健気な姿勢も分からないでもない。だが、それとこれとは話が別だ。

「あー、じゃあとつとと帰って頂けませんかねえ」

迷惑だ、という気持ちが最大限伝わるように、和奏は極力低い声を作る。それを聞いた都子の眉が跳ねあがった。

「何ですって？」

「あのね、まだ高校生のお嬢さんには分からないかも知れないけどね。会社は子供の遊び場じゃないの。毎日じゃないにしても、貴方がしょっちゅうここまでやってきて、こっちは本当に迷惑してるの。分かったら、ううん分かってなくても、とにかくお子様はさっさとお家に帰りなさい」

「な……ッ！」

その声に都子は一気に激昂した。彼女はぶるぶると肩を震わせ、怒りに薔薇色の唇を戦慄かせる。

「立川っ！ この無礼な女をどうにかして！」

「お嬢様、無茶を仰らないで下さい。そもそも無礼なのはこちらの方ですっ」

立川はそれを何とか宥めようとしていた。どうやら彼は主とは違い、そこそこ常識人のようだ。雇い主には逆らえず、仕方なくいつも着いてきているといった所か。

都子はキツと和奏を睨みつけ、

「大体、貴方一体いつの間に斗真くんに取り入ったんです！？ 斗真くんの事はちゃんと興信所に調べさせていた筈ですのに！ 貴方の事なんて一言も書かれていませんでした！ なのにどうして、いつの間に……！」

と叫んだ。何だか物凄い事を言っているが、一瞬呆気にとられた直後、和奏はふと首を傾げた。

「興信所……？」

そもそも、斗真と食事に出掛けるようになったのが、興信所を使われていた時の事を考えた保険だった筈だ。そしてちゃんと調べさ

せていたのなら、都子は和奏の事を知っていてもおかしくない筈なのだ。

ならば、何故都子は和奏を知らなかったのか――？

「お嬢様、もう行きましょう」

立川がやや強引に都子の肩を掴んだ。まだ言い足りない様子の都子を、そのままずるずると引き摺っていく。停めてあった高級車に都子を押し込んだ立川は、最後に申し訳無さそうに和奏に頭を下げ、自らも運転席へと乗り込んだ。

その様子を呆然として見送った和奏は、数秒の間を置いて、

「えーと……とりあえず、連絡しておこう……」

と、ようやくするべき事に気付いたように呟いた。

今、都子が来たという事を斗真にメールすると、間を置かずには彼からの電話があった。流石に昼に来るとは思っていなかったらしい。電波越しに届く彼の声は、やや焦った様子が感じ取れた。

「あいつ学校はどうしたんだ」

「テスト期間らしいですよ」

「テスト期間……。はあ……。それなら学生らしく、とっとと家に帰って勉強したらどうだ」

呆れたような斗真の声に和奏は思わず吹き出してしまふ。

「何だ？」

「あ、いえ。私も同じ事を思ったものですから」

こんな状況ではあるが、それでも自分の思考と斗真の思考がシンクロしていた事が何だかおかしくて、それから妙に嬉しい気がして和奏は小さく笑った。

怒涛の昼休みを終え、午後の業務も終了した和奏は、会社の外へ

出た所でまたしても昼に見た顔を見つけた。

「あ……」

ただし、今は件の『お嬢様』は居ない。立川が一人で立っていた。
「こんばんは。都子さんはもうお家に？」

この時点で和奏は立川に対して、同情的な気持ちになっていた。
だから極力穏やかに声をかける。すると彼は「ええ、ここには居ません」と返し、小さく頭を下げた。

「立川と申します。少しお時間宜しいですか」

近くのカフェに入りコーヒーを注文すると、立川はまず最初に謝罪の意を述べてきた。

国峰家に雇われている立場上、ただの使用人である自分には都子を止める事は出来ないが、迷惑をかけてきて本当に申し訳ない。そんなような事を告げられ、和奏は「気にしないでほしい」と返すしか出来なかった。雇用主に逆らえないのは、雇用される側としては極自然な事だ。それは社会人であり、また斗真と雇用関係にある和奏にも充分に分かっている事だった。

そして和奏は、昼からずっと抱いていた疑問を直接ぶつける事にした。

「都子さん、興信所がどうか言っていましたよね。調べさせた筈なのに私の存在を知らなかった、って。あれは一体どういう事が、立川さんはご存知ですか？」

興信所を使っていたのなら、定期的に二人で食事に行っていた事の報告が無い筈がない。

すると立川は少し困ったような顔で苦笑した。

「お嬢様の所へ余計な情報が行かないように、全て私が処理をさせて頂いていたものですから」

つまり、都子の所へ報告書が行くまでに、立川の手が入っていたという事だ。

柔らかな猫っ毛、柔和な表情、優しい喋り口。とにかく穏やかな印象のある立川だが、優しそうな顔で都子に常に従うフリをして、意外にきっちり仕事をしているな、と和奏は少し感心した。

そして同時に疑問が浮かぶ。こうして都子の見えない所で色々動いているという彼は、今回の事について、一体どう考えているのか、と。

「お聞きしたいんですが……立川さんはどう思ってたっしやるんですか？」

「どう、と仰いますと」

「都子さんの事、と言うか、都子さんと斗真さんの事です」

和奏の言葉に立川は難しい顔をした。それは自分が答えていい話なのか否か、を決め兼ねているように見えた。

しばらく黙って考えたらしい彼は、やがて

「……どうでしょう」

と、ぽつりと口にした。

「斗真様は素晴らしい方だと思います。お嬢様の気性を良く知っているし、仕事も出来て、家柄も申し分ない。何より、お嬢様が子供の頃からずっとひたむきに想い続けていた方です。ですが……」

立川はそこで一旦言葉を止めた。

「お嬢様の望む通りに斗真様と結婚出来たとして、それでお嬢様が幸せになれるとは……私には、思えないのです」

それは主である都子の現時点での行動を全否定するも同じだ。

「幸せに……？」

「羽山さんの前でこんな事を言うのは何ですが、仮に斗真様がお嬢様の事を、本当に本心から好きになって下さるのならば、その先にある結婚も幸せなものになるでしょう。ですが、それは……」

難しいでしょうね――。

静かに続ける立川は、やはり何処か困ったような顔をしていた。

否、寂しそうに、哀愁を漂わせた表情、と言った方が正しいのかも知れない。

「立川さんはどうされたいんですか？」

気付いた時には、和奏はそう訊ねていた。この男は一体何を望んでいるのだろう。常に都子に付き従っている彼は、都子についてどうするのが最善だと思っているのだろう。

「私はお嬢様が幸せになって下されば、それでいいんです」

都子が昼間から会社にやってきた。

そんな報告を和奏から受けた斗真は、軽い眩暈を感じたような気がしてこめかみを押さえた。

社内まで押し掛けてくるほどの非常識ぶりではないにせよ、健全な高校生としてはあるまじき行動だ。テスト期間だという事で学校をサボった訳ではないらしいが、しかし笑って過ごせるような状況ではない。

電話の向こうに聞こえる和奏の声は、やや疲れているように感じた。仕事だし図太いからあまり気にはしていませんけど、と言う和奏だが、それでも全く疲労を感じないという訳ではないだろう。それぐらい、斗真にだって分かっている。

「頃合い、か」

腹を決めたように斗真は呟いた。

極力波風を立てぬよう、都子の方から諦めてくれるのを待ちたい、と和奏には言ったものの、この段階まで来るとそれは恐らくゼロに等しい可能性である事は分かっていた。

だから、和奏の存在を或る程度都子に認知させたら、その後に告げようと決めていた。

自分が都子を選ぶ事は無い、と。

それから都子のテストが終わるまでの数日間を待ち、斗真は国峰本家を訪れた。両親が他界してから、厚意で度々世話になる事もあったその家——屋敷と呼んだ方がしっくり来るが——は、斗真にとって第二の家のような場所でもあった。今日は都子以外の家族は出払っているようだったが、斗真にとってそれは寧ろ都合が良い事だ

った。きつと都子を酷く傷つける事になる。あまり他の家族の顔を見たくはない。

若い女の使用人が斗真の来訪を伝え、都子は上機嫌に彼を迎え入れた。紅茶を持ってきた使用人が下がり都子と二人きりになると、

「話がある」

と、静かに斗真が切り出した。

「お話？ 何かしら？」

斗真の隣に腰を下ろしながら、都子は楽しそうに笑う。これから言われる事を彼女は知らない。

「大切な話なんだ」

「大切な……？」

一体何だろう、と首を傾げた都子は、次に思い当たったようにポンと手を叩いた。

「駄目よ、斗真くん。まだ早いわ。そりゃあ春には高等部を卒業するけど、わたしその後は大学部に進むんだもの」

「……は？」

あまりに唐突な都子の切り返しに、斗真は一瞬虚を突かれたようになってしまう。会社では決して見せない、少々間の抜けた返し方をしてしまった。そんな彼を置いて、都子は真面目な顔で続けた。

「でも決めておく所は決めておいた方がいいのかしら。お父様にもそろそろ相談した方がいいのよね、きつと」

「おい都子、何の話……」

「あのね、わたし式を挙げるなら帝国ホテルがいいと思うの。色々いい所はあるけど、やっぱり昔からある所が安心でしょ？ だから――」

「都子！」

「っ！」

突然強く名前を呼ばれ、都子は大きな瞳を更に大きく円くした。次に、一体何だろう、と首を傾げる。こてりと首を傾げる仕草は愛

らしいが、そこに恋愛感情を抱く事は斗真にはやはり出来ない。
都子の細い肩を掴み、斗真は彼女の瞳をしっかりと覗き込んで、
告げた。

「俺は、お前とは結婚出来ない」

思えば、はつきりと否定の意を口にしたのは初めてだったかも知れない。逃げられぬように肩を掴まれた都子は、呆然と目の前の顔を見つめた。

「……斗真、くん？」

信じられない、とでも言うかのように、斗真の名を呼ぶ声が震えた。

「な……何で？ どうしてそんな事言うの？」

「ここしばらく見てきて分かっただろう。俺には付き合っている相手が居る」

敢えて和奏の存在を誇示してきた。それは都子に「和奏は特別だ」と思わせる為だった。でなければ、意味が無い。契約してまで『恋人』を和奏に演じさせている意味が。

これまでの斗真の女付き合いを把握していた都子は、それが息抜き遊びのようなものだという事にも気付いていた。どれもこれも言い寄ってきたのは相手の方で、斗真が本気になっっている訳ではないようだった。だから大抵長続きはしていない事を、都子は知っていた。

そして、就職して以降の斗真に女の影は無かった。都子の知る限り、彼が学生時代を卒業してからは和奏が初めての恋人だったのだ。「付き合ってるって……」だって大学の時とか、今までの……遊びで付き合ってた人と一緒でしょ？ そうよね？」

「違う。彼女は特別なんだ」

しっかりと芽を潰しておかなければならない。一片の希望も残らぬように。だから斗真は一言一句はつきりと、都子の耳へ流し込む。

斗真のその言葉を聞き、都子はしばらくの間、黙りこくっていた。彼に言われた言葉の意味を必死で整理し、脳内で咀嚼しようとしているようだった。

やがて、その薔薇色の唇が小さく声を紡ぐ。

「斗真くん……羽山さんの事が、好きなの……？」

「ああ」

「わたしをお嫁さんには……してくれないの……？」

「……ああ。出来ない」

「だって……昔、約束して……」

「お前が大人になったら、いずれ忘れるだろうと思ってたんだ。……今まで言い出せなくて、すまなかった」

都子の肩から手を離れた斗真が、静かに頭を下げる。

ひゅつと都子の喉から息を呑む音が聞こえた。それ以降、彼女が言葉を発する事は無かった。

立ち上がった都子はふらりとリビングの扉へ向かう。彼女はそのまま廊下へ出ると、自室へと戻っていったようだった。てつきり目の前で泣きだされるかと思っていた斗真は、その予想が外れた事に驚きながらも、国峰本家を後にした。

車に乗り込んだ斗真は、真っ直ぐ自宅へ帰る事にした。ハンドルを握りながら、呆然とした都子の顔を思い出す。

罪悪感が付き纏っていた。

幼い頃から都子の事は知っていた。都子是我儘だが良く笑う少女で、斗真にはとても懐いていたので斗真の前ではいつも楽しそうな顔をしていた。

——あんなに傷付いた顔を見たのは、初めてだ。

斗真にとっての都子は妹のようなものだ。結婚などは出来ないが、

そこを除けばこれまで普通に可愛がってきた。あのような傷付いた顔はあまり見たくはなかった。

信号が赤になる。斗真はブレーキを踏み、助手席に放った携帯電話をチラリと見た。契約で結ばれた彼女には、この事を報告するべきだろう。

「……やめるか」

だが、何となく気が引けてしまった。まったくそういう対象ではないといえ、他の女を傷つけた後で和奏の声を聞く事が、何故だか憚られる気持ちになったのだ。

これまでの都子には、手に入らない物は何も無かった。

子供の頃から、友達が持つクマのぬいぐるみが可愛いと言えば、それよりもっと大きなぬいぐるみを買って貰えた。同級生がイミテーションの宝石のネックレスをつけている頃、都子は本物の宝石のネックレスをつける事が出来た。新発売の化粧品は皆よりも一足早く手に入ったし、映画の試写会のチケットだって幾らでも手に入った。

「……だけ――」。

「うっ……うっ……」

電気も点けない暗い部屋に、低い嗚咽が響く。ベッドに伏せて泣き続ける都子の顔は、既に涙でぐしゃぐしゃだった。

「どうして、斗真くん……お嫁さんにしてくれる、って……わたし、ずっとそれ信じて……ひっく……」

都子自身、こんなにも長い間、幼い頃の口約束を引き摺るのは少しおかしいのではないか、と気付いていた。周りの友達は何、幼少の頃の初恋などさっさと忘れて、新しい恋をして新しい彼氏を作っている。そういう点において、都子は自分が周りと違っていると分かっていた。

——でも、好きだったから。
小さい頃からずっと斗真を好きだったから。

「なのに、今更……ひどいよお……うう……っ」

どうせならこの想いを、もつと早く断ち切ってくれていたら良かった。けど斗真はそうしなかった。都子が成長すれば、勝手に潰える程度の想いだと彼は考えていたのだろう。

嗚咽に混じり、コンコン、とノックの音が響いた。

「お嬢様、夕飯のお時間です」

扉の向こうから聞こえたのは立川の声だった。都子がそれを無視すると、もう一度ノック音が響く。

「お嬢様？　いらっしやいませんか？」

黙っているのだからそのまま諦めて立ち去ってくれないだろうか。こんな気持ちの時に他人と顔を合わせたくない。

しかしそんな都子の想いとは裏腹に、控え目にドアノブが回される音がした。暗い部屋の中に一筋の光が漏れこむ。

立川は最初、やはり都子が居ないのかと思ったようだが、すぐにベッドの上で丸まっている主の姿を発見して目を円くした。

「お嬢様？」

斗真が来た時、立川は屋敷に不在だった。帰宅してから斗真の来訪を聞かされ、それならばきつと都子のテンションも高いに違いないだろうと彼は考えていた。だから部屋の電気が点いておらず、泣いている様子の彼女を見て酷く驚愕した。

「……入ってこないで」

声をあげて泣いていたせいか、掠れ気味になった低い声で、呟くように都子が言った。

「……ご飯も要らないわ。だから放っておいて。……早く出ていって」

そんな主の声に、立川が逆らう事は出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4628w/>

ビジネスライク・ラバーズ

2011年10月10日03時21分発行